大妻女子大学　地域連携推進センター
令和元年度年報

第 7 号

令和 2 年 10 月

大妻女子大学　地域連携推進センター

目　次

地域連携推進センターの概要 ……1
地域連携推進センター設置の背景 ……1
運営基本方針 ……1
機能と役割 ……1
組織構成 ……2
委員会構成 ……2
構成員 ……3
施設設備 ……4
令和元年度 地域連携プロジェクト報告 ……5
令和元年度 地域連携プロジェクト概要 ……5
令和元年度 地域連携プロジェクト採択一覧 ……5
三番町アダプトフラワーロードの会との地域美化活動 ……6
障害者雇用企業との連携による T ボール大会の開催 ……8
子どもの育ちを地域で見届ける「大泉こども食堂」プロジェクト ……10
大妻囲碁フェスタ　―坂の上の街を囲碁で盛り上げる― ……12
千代田&多摩地域　子供自然体験教育プロジェクト ……14
多摩 NT における子どもと中高年の居場所づくり ……16
むささび食堂：食事がつなぐ地域の輪 ……18
神保町の出版と書店を元気にするプロジェクト 2019 ……20
能登の里海を守る：地域の活性化と海育普及プロジェクト ……22
体験から学ぶ防災～防災と言わない防災を目指して～ ……24
多摩市における街区公園改修に関するプロジェクト ……26
からきだ匠(たくみ)カフェ～地域がつながる場所～ ……28
令和元年度 地域貢献プロジェクト報告 ……30
令和元年度 地域貢献プロジェクト概要 ……30
令和元年度 地域貢献プロジェクト採択一覧 ……30
働く男性女性のプレコンセプションケアの支援 ……31
多摩図書館ツアー2019 (学びのかなめ、公共図書館、学校図書館、大学図書館、
そして世界の図書館を知る) ……33
大妻力による世羅町の 6 次産業化支援を区民の健康力向上につなげる
地域貢献活動について ……35
Likio Ellinidon：ギリシャ伝統舞踊公演 ……37
大妻さくらフェスティバル 2020 ……39
アトリウムステージプログラム ……39
令和元年度地域連携プロジェクト報告会プログラム ……40
俳句大賞発表 ……40
神輿展示 ……41

エコな癒しのクラフト作り・復興支援・食育体験 …… 41
ねりきり販売 …… 41
業務報告 …… 42
令和元年度の事業 …… 42
令和元年度の予算・決算報告 …… 46
令和元年度の会議 …… 46
資料 …… 47
大妻女子大学地域連携推進センター規程 …… 47
大妻女子大学地域連携推進センター運営委員会規程 …… 49
大妻女子大学地域連携推進センター企画実行委員会規程 …… 51

地域連携推進センターの概要

地域連携推進センター設置の背景

平成 17 年 1 月の中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像（答申)」において、21 世紀における大学の使命は、教育と研究だけでなく、社会貢献が第三の使命とされました。大学の自己点検・評価にも含められているように、大学が果たすべき役割の中で、学術研究や人材育成に加えて「地域連携」が重要性を増してきています。

本学でも、「大妻学院のミッションと経営指針（平成 20 年 9 月)」において「教育機関としての社会的責任を認識し地域社会との連携に努める」ことが掲げられ、学院の社会的責任として「今後地域貢献を展開させていく組織として教職員協働による地域連帯センター（仮称）による組織的支援が欠かせない」と述べられています。

平成 21 年度に開催された「地域社会との連帯に関する懇話会」では、様々な角度から本学の地域連携の在り方を検討した結果、今後一層、在学生、教員、卒業生と地域社会との連携を活性化して広報につなげると共に、それらを促進する機能として「大学の社会的責任（USR）全般に関わる情報の整理と一元化、連絡・調整、広報の一部を担うもの」として地域連携に関わる包括的センターが必要であるとまとめています。

また、これら社会貢献や社会的責任という視点に加え、学生が地域の諸活動に参加することは、主体性や積極性を養い、本学の教育理念である「関係的自立」の在り方を、実体験を通して考える機会となり、教育的観点からも地域連携の推進が重要であることは言うまでもありません。

これらを背景として、平成 25 年 4 月 1 日に地域連携推進センターが新たに設置されました。

運営基本方針

1. 大学の社会的責任として、地域連携を積極的に推進することを基本方針とする。
2. 地域連携でいうところの「地域」は、近隣地域に限らず、地理的範囲を超えた保護者、卒業生、関係機関、企業、行政など、大妻女子大学を取り巻くステークホルダー全体を含むものとする。
3. 地域連携の内容は、大妻女子大学の教育理念である「関係的自立」の考えを踏まえ、学生が様々な地域と関わる中で主体性や自立心を身に付けることができるよう、その活動に在学生が直接関わったり、その成果を在学生の教育に反映できるものについて、重点的に取り組む。

機能と役割

1. 広報機能

   地域連携のテーマの下、学内における既存の活動や事業をホームページ等でタイムリーに発信するとともに、年次報告の形で、本学の地域連携の実績を外部に公表する。

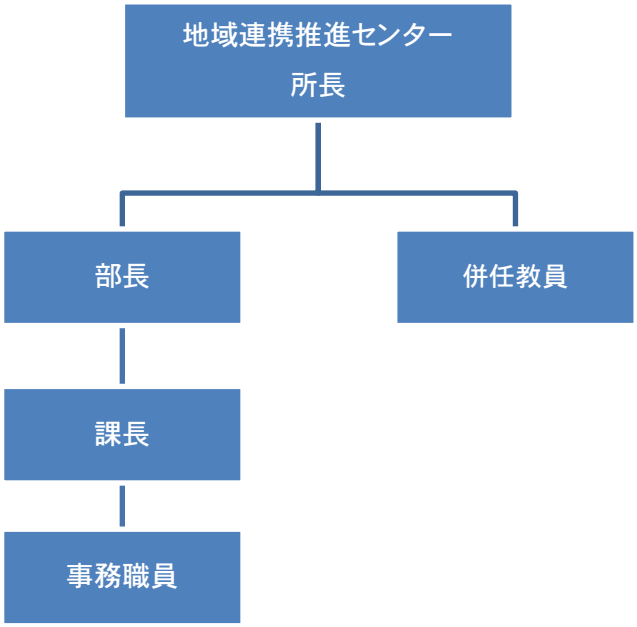
2. マッチング機能

   社会のニーズ（市民、企業、行政等）と大学の持つ機能のマッチングを支援し、学外からの「地域連携」に関連した相談や紹介要請に応え、学内の資源につなげる。

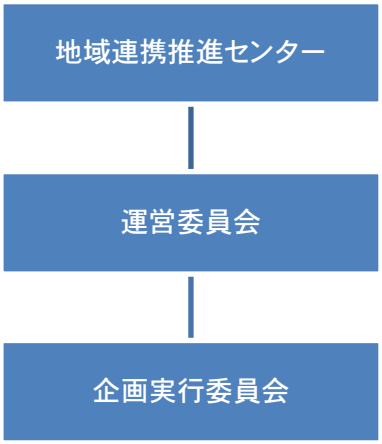
3. 企画・活動促進機能

社会貢献や社会的責任の実行のみでなく、学生が地域の諸活動に参加することで「関係的自立」の在り方を体得するという、教育機能を併せ持つ地域連携活動を企画し、活動を促進するため、「地域連携プロジェクト事業」(5 ページ参照) を、また、より地域に根ざした活動を促進するため「地域貢献プロジェクト事業」(30 ページ参照) を地域連携推進センターの下に創設し、その運営を行う。

組織構成



委員会構成



構成員

令和元年度　地域連携推進センター名簿

構成員	氏　名	所属等
センター所長(学長が任命)	井上　美沙子	副学長
センター事務部長	村田　裕道	事務局
センター事務課長	佐々木　裕子	事務局
センター事務職員	栗田　陽介	事務局
センター事務職員	中本　猛	事務局
センター事務職員	宮澤　律江	事務局
併任教員(学長委嘱)	阿部　栄子	家政学部
	関本　紀子	文学部
	炭谷　晃男	社会情報学部
	堀　　洋元	人間関係学部
	安藤　聡	比較文化学部
	堀口　美恵子	短期大学部

令和元年度　地域連携推進センター運営委員会名簿

構成員	氏　名	所属等
センター所長	井上　美沙子	副学長
センター事務部長	村田　裕道	事務局
センター事務課長	佐々木　裕子	事務局
家政学部長	青江　誠一郎	家政学部
文学部長	村上　丘	文学部
社会情報学部長	山倉　健嗣	社会情報学部
人間関係学部長	福島　哲夫	人間関係学部
比較文化学部長	佐藤　円	比較文化学部
短期大学部長	下坂　知惠	短期大学部
人間文化研究科長	堀江　正一	人間文化研究科
事務局長	鈴木　勉	事務局
その他学長の委嘱する者	重吉　博右	常任理事
	高山　宏	副学長

令和元年度　地域連携推進センター企画実行委員会名簿

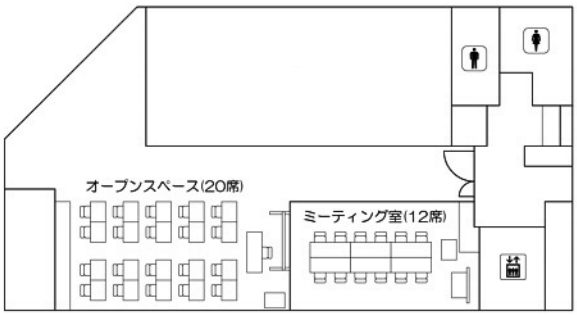
構成員	氏　名	所属等
センター所長	井上　美沙子	副学長
センター事務部長	村田　裕道	事務局
センター事務課長	佐々木　裕子	事務局
センター事務職員から１名	栗田　陽介	事務局
併任教員	阿部　栄子	家政学部
	関本　紀子	文学部
	炭谷　晃男	社会情報学部
	堀　　洋元	人間関係学部
	安藤　聡	比較文化学部
	堀口　美恵子	短期大学部
各学部・研究科から選ばれた専任教員	宮田　安彦	家政学部
	関本　紀子	文学部
	炭谷　晃男	社会情報学部
	堀　　洋元	人間関係学部
	安藤　聡	比較文化学部
	堀口　美恵子	短期大学部
	松本　美鈴	人間文化研究科

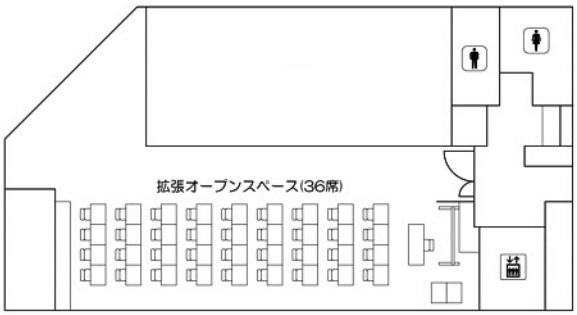
施設設備

地域連携推進センター事務部は、千代田校の別館 7 階にあります。

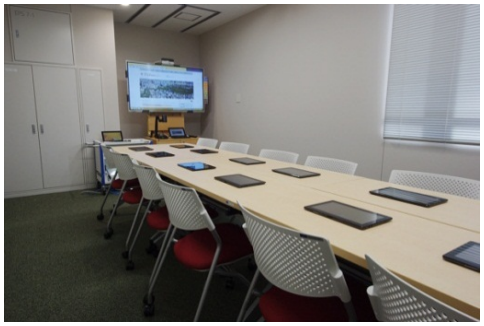
別館 7 階にはミーティング室、オープンスペースもあります。ミーティング室の間仕切りは可動式となっていて、間仕切りを移動して収納すると、1 つの大きなオープンスペースになります。

ミーティング室とオープンスペースには、文部科学省の平成 25 年度「私立大学等教育研究活性化設備整備事業」によって導入された ICT 機器が設置され、学生、教職員、地域の方々による地域連携活動、情報発信の場として活用されます。収容人数はミーティング室が 12 名、オープンスペースが 20 名で、ミーティング室の間仕切りを収納して大きなオープンスペースにすると 36 名になります。





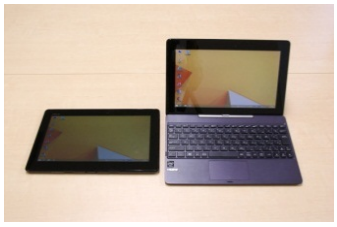
オープンスペース



ミーティング室

導入された ICT 機器は、タブレットパソコン 40 台、電子黒板、プロジェクター、教材提示装置、講義支援システムなどで、パソコンはすべて無線 LAN でつながっています。教員のパソコン画面を電子黒板に映し出し、電子ペンで画面にマーキングをしたり、受講生のパソコン画面を電子黒板に提示して、受講生全員でディスカッションをするなど、ICT（情報通信技術）を活用したいろいろな使い方ができます。

Windows8.1 仕様のタブレットパソコンは、画面を指でタッチして操作できるだけでなく、必要に応じてキーボードを接続し、通常のノートパソコンとしても使うこともできます。また無線 LAN とバッテリー駆動により、パソコンをコードレスで扱えるため、机の場所にとらわれることなく、20～30 人の講義形式から、数人ずつのグループ学習まで幅広く対応することができるようになっています。



タブレットパソコン

令和元年度 地域連携プロジェクト報告

令和元年度 地域連携プロジェクト概要

1. 趣旨

教職員のグループ又は教職員と学生のグループによる、学生の主体性や自立心が身に付く地域連携活動の一層の推進・発展を図ることを目的に、その活動経費を補助する。

2. 対象テーマ

地域社会との連携を活性化するとともに、学生の教育に反映できる活動。分野は不問。

3. 応募資格

大妻女子大学の複数の教職員又は教職員と学生（大学院生・短大生を含む）で構成するグループ。
応募するグループは、下記 3 つの要件をすべて満たしていること。

① 地域連携に資する活動であること（地域連携の推進）
② 在学生が主体的に参加する活動又は成果を在学生の教育に反映できる活動であること（地域連携と教育の融合）
③ 個人ではなくグループによる活動であること（学内連携の推進）

4. プロジェクト支援期間

令和元年 5 月 9 日(木)～令和 2 年 3 月 31 日(火)

5. 支援額及び採択件数

支援額：1 プロジェクトにつき 30 万円を上限
採択数：10 件程度

令和元年度 地域連携プロジェクト採択一覧

プロジェクト名	代表者
三番町アダプトフラワーロードの会との地域美化活動	石井　雅幸
障害者雇用企業との連携による T ボール大会の開催	小川　浩
子どもの育ちを地域で見届ける「大泉こども食堂」プロジェクト	加藤　悦雄
大妻囲碁フェスタ―坂の上の街を囲碁で盛り上げる―	川之上　豊
千代田&多摩地域　子供自然体験教育プロジェクト	甲野　毅
多摩 NT における子どもと中高年の居場所づくり	炭谷　晃男
むささび食堂：食事がつなぐ地域の輪	田中　直子
神保町の出版と書店を元気にするプロジェクト 2019	深水　浩司
能登の里海を守る：地域の活性化と海育普及プロジェクト	細谷　夏実
体験から学ぶ防災～防災と言わない防災を目指して～	堀　洋元
多摩市における街区公園改修に関するプロジェクト	松本　暢子
からきだ匠(たくみ)カフェ～地域がつながる場所～	八城　薫

三番町アダプトフラワーロードの会との地域美化活動

石井　雅幸　教授
(家政学部　児童学科)

1　はじめに

本取り組みは、2007 年から、三番町町会、九段小学校、(株)プランナーワールド、大妻学院が協定を結んで取り組んでいる三番町フラワーロードの会の活動です。番町学園通りの九段小学校から大妻学院交差点までの街路樹下のますの中に夏前と冬前に花を植えて、管理を行うことを通して、三番町の街をみんなで美しくしていきましょうという取り組みとしてはじまりました。九段小学校の児童が中心となって花を植えその活動を地域の大人が支えていこうというものでした。その後、本活動は、九段小学校の校舎改築で児童が地域から不在となり、大妻女子大学の児童学科がその肩代わりして花植えや管理を行うといった変化をしてきました。

今は、九段小学校の児童が三番町に戻ってきましたので、九段小学校の児童を中心とした活動が再開しています。もちろん、大妻女子大学は引き続き本活動を支える立場を継続しています。この会の立ち上げ時から、学内では児童学科が中心になって活動してきた関係もあり、児童学科が継続して活動に関わらせていただいています。

その後､2015 年に狭山台にあったキャンパスから 1 年生が千代田キャンパスに移転してきました。これまで狭山台キャンパスで本学科の 1 年生が行っていた体験的活動の一環を千代田キャンパス周辺で行うことを目的にして、本活動に 1 年の学生が科目の一つである児童学基礎体験演習の一つの取り組みとして始めました。それとともに、花を植える範囲、一緒に活動する地域の団体も拡大しています。

2　令和元年度の活動内容

活動した日時に従って活動内容を紹介します。

○5 月 13 日(月)　九段小学校にて「三番町アダプトフラワーロードの会計画委員会(春夏)」実施。

○5 月 23 日(木)　9 時 30 分から花を植えるための準備(フラワーロード対象の街路樹下の土の耕し、堆肥を加える作業の実施(地域の方々と学生・教員))。

○5 月 29 日(水)　花の搬入(九段小学校)　花を分ける作業等、本番の予定確認の実施。

○5 月 30 日(木)　9 時 30 分から三番町アダプトフラワーロードの会(春夏)の実施(九段小学校児童･九段幼稚園園児・九段小、九段幼稚園教職員・地域の方や企業の方と学生・教員で花を植える)。

○5 月 31 日(金)～10 月上旬　花の管理の実施(水が不足している時の散水、終わった花の摘み取りや雑草抜きなど、地域環境美化活動を地域の方々と学生・教員・九段小学校職員が継続的に行う)。

1 週間に 1 回ないしは 2 回は、交代で水をあげたり、雑草を抜いたりする作業を行いました。

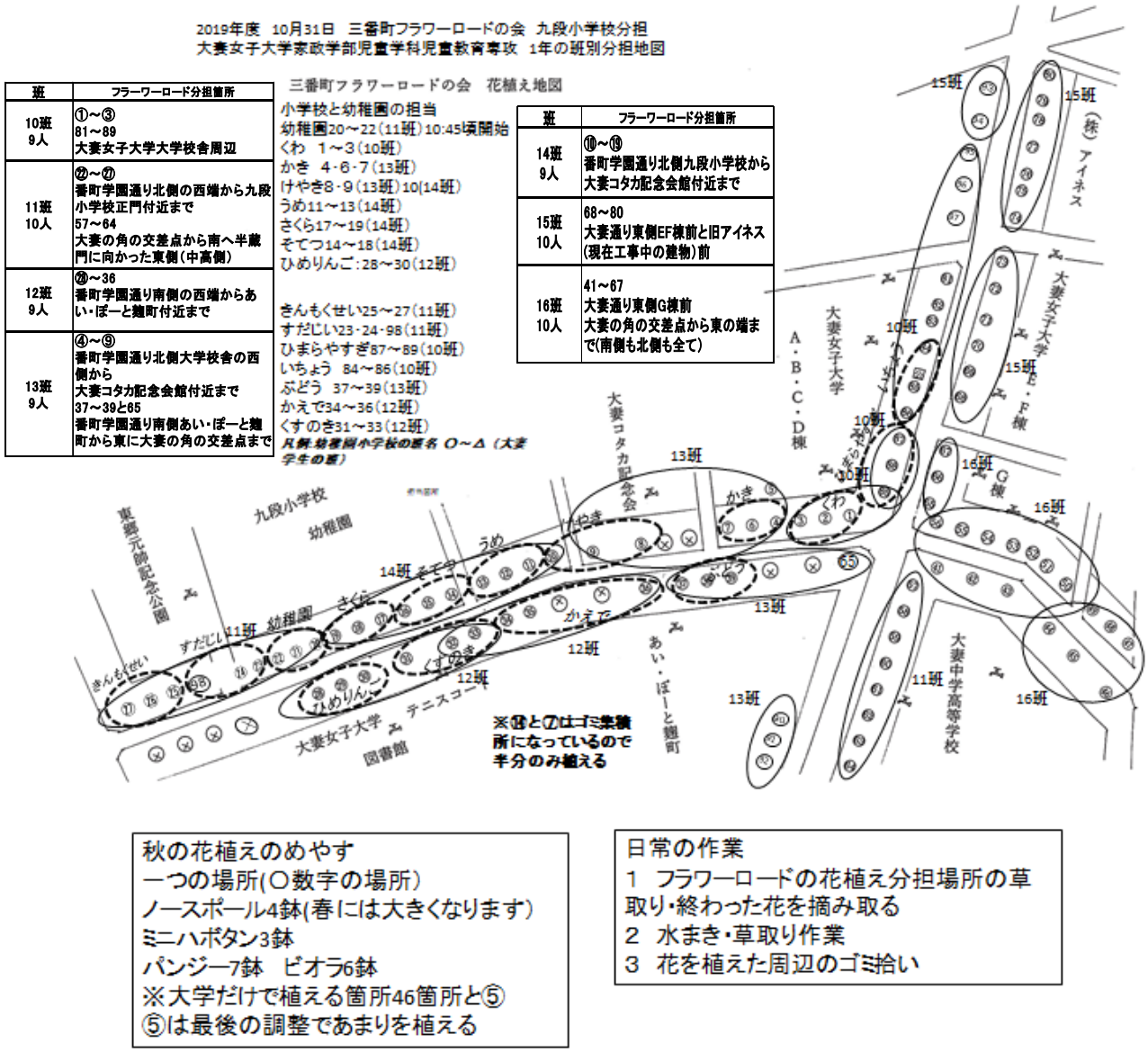
○10 月 8 日(火)九段小学校にて「三番町アダプトフラワーロードの会計画委員会(秋冬)」実施。

○10 月 24 日(木) 9 時 30 分から花を植えるための準備(フラワーロード対象の街路樹下の土の耕し、堆肥を加える作業の実施(地域の方々と学生・教員))。

○10 月 30 日(水)花の搬入(九段小学校)　花を分ける作業等、本番の予定確認の実施。

○10 月 31 日(木)9 時 30 分から三番町アダプトフラワーローの会(秋冬)の実施(九段小学校児童・九段幼稚園園児・九段小、九段幼稚園教職員・地域の方や企業の方と学生・教員で花を植える)。

○11 月 20 日(水)　31 日に植えて不足した苗を九段小学校に届けるとともに、中高が花植え作業実施。
○11 月以降 4 月まで、1 週間から 10 日に 1 回の割で散水、ゴミを拾い、草取り実施。



班	フラワーロード分担箇所
10班 9人	①～③ 81～89 大妻女子大学大学校舎周辺
11班 10人	㉒～㉗ 番町学園通り北側の西端から九段小学校正門付近まで 57～64 大妻の角の交差点から南へ半蔵門に向かった東側(中高側)
12班 9人	㉘～36 番町学園通り南側の西端からあい･ぽーと麹町付近まで
13班 9人	④～⑨ 番町学園通り北側大学校舎の西側から 大妻コタカ記念会館付近まで 37～39と65 番町学園通り南側あい･ぽーと麹町から東に大妻の角の交差点まで

班	フラワーロード分担箇所
14班 9人	⑩～⑲ 番町学園通り北側九段小学校から大妻コタカ記念会館付近まで
15班 10人	68～80 大妻通り東側EF棟前と旧アイネス(現在工事中の建物)前
16班 10人	41～67 大妻通り東側G棟前 大妻の角の交差点から東の端まで(南側も北側も全て)

図１　三番町フラワーロード花を植えている範囲

3　終わりにかえて：参加している学生が感じた思い

学生たちは、地域の皆さんや九段小学校の児童の皆さんと活動できることを楽しんでいます。昨年度参加した学生は「事前に草むしりと肥料をまく作業を行いました。時間がかかり、大変でしたが、子どもたちのために、きれいにしなくてはならないという思いが強くなってきました。小学生と花を植えて水をまいた時、小学生が楽しそうな顔で作業している姿を見て、私たちが花植えできる環境を事前に整えたから子どもたちも花を植えたい気持ちが大きくなったのではないかと感じました。」と述べています。学生たちは、地域の中にあること、地域の子どもとともに活動していることを感じたようです。今後もこの活動を継続していきます。

障害者雇用企業との連携によるＴボール大会の開催

小川　浩　教授
（人間関係学部　人間福祉学科）

本事業は、多摩地域にある大手企業の特例子会社（障害者雇用を進めることを目的に設置された子会社）等から成る「多摩障害者雇用企業連絡会」と、大妻女子大学人間関係学部の有志が連携し、働く障害者のためのスポーツ大会として「多摩障害者雇用企業Ｔボール交流大会」を開催するものです。多摩キャンパスでの開催は今回で４回目となります。

1．大会の様子

本年度は、令和１年４月 28 日(日)に開催し、19 社 29 チームが参加しました。応援参加者も含めると 900 人を超える人々が多摩キャンパスに参集し、新緑に包まれた多摩キャンパスのグラウンドが大いに賑わいました。学生側は小川ゼミ３年生を中心に、呼び掛けに応じて参加した２年生を含めて 26 人が参加。学生の役割は各チームに入って応援を盛り上げたり、一緒にプレーをしたりすることです。学生たちは、朝のうちは緊張していましたが、各チームの皆さんに温かく迎えて頂き、気さくに話しかけて頂くことでリラックスし、午後はすっかり溶け込んでいる様子でした。また、今回は多摩キャンパスの実行委員だけでなく、大妻女子大学チアリーディング部のリンクスも協力してくれました。昼休みにグラウンドで華やかな演技の披露があり、ダイナミックな動きと笑顔に会場は一段と盛り上がりました。また、運営には、日本Ｔボール協会、東京Ｔボール連盟が全面的に協力して下さり、多数の審判が手弁当で駆けつけて下さいました。このように、企業側スタッフ、学生、教職員、審判のボランティアなど、多くの人々の協力によって、これだけ大きなイベントが多摩キャンパスで開催されることは大変意義のあることと考えます。

2．大学と企業のウィンウィンの関係

本事業は大学、企業双方にとって多くの利点がありますが、以下に簡単に整理してみます。

＜企業側の利点＞

会場の確保：　本大会は年々参加者が増え、1,000 人近い人が集う大規模な大会となりました。4 カ所同時に試合を行えるグラウンドが必要となり、会場確保は容易ではありません。大妻多摩キャンパスの上下のグラウンドが安定的に使えることが、大会継続の一助となっています。

学生との交流：　単に会場を利用するだけでなく、学生が各チームに入って障害のある参加者と交流することが、大会を明るく楽しい雰囲気に盛り上げることに大きく貢献しています。「大妻での T ボール」は障害のある従業員にとって、楽しみな年間行事となっています。

＜大学側の利点＞

障害のある人との交流：　福祉学を学ぶ学生にとって、学内のイベントで障害のある人と交流できることは貴重な学びの機会となっています。また、福祉施設で行うボランティアや社会福祉士実習と異なり、障害のある人と「支援する側・支援を受ける側」といった関係でなく、自然な立場で交流できることは、「障害者＝福祉サービスの対象」といった固定的な考えを打ち破り、より柔軟で広い視野を持つために重要な機会となっています。

企業との連携：　人間福祉学科では、平成 30 年度に厚生労働省より、高等教育機関として初めて職場適応援助者（ジョブコーチ）養成研修機関の指定を受けました。最近では、大企業の障害者雇用部門においてジョブコーチのニーズが高まっており、大妻で社会福祉士や精神保健福祉士の資格を取得し、ジョブコーチ養成研修を修了した人材の採用に興味を持つ企業も増えています。既に複数の企業において、この T ボール交流大会を経験した大妻の卒業生がジョブコーチとして活躍しています。今後も、T ボール交流大会を通して障害者雇用企業との連携を維持していきたいと思います。

3. 更なる展開

また、本年度は 10 月 20 日(日)、大妻女子大学多摩祭の 2 日目に、地域連携推進センター多摩企画の位置づけで、「大妻多摩祭 T ボール交流大会」を開催しました。こちらは、人間福祉学科の教職員と学生で実行委員会を構成し、大会の企画、事前準備、当日の運営を主体的に行うものです。参加チームは 9 チーム、約 200 人の選手と関係者が、T ボール大会だけでなく学生の出店や展示を楽しみ、多摩祭を賑やかにしてくれました。ここでも、チアリーディング部のリンクスが協力してくれました。

地域連携プロジェクトにより「多摩障害者雇用企業 T ボール大会」を 4 回行った経験が蓄積され、学生が教職員のサポートを得ながら主体的に小規模な大会を開催できるようになりました。学生が自分たちの力でイベントを企画・運営することで、学生数の少ない多摩祭に人を呼び込み、多摩キャンパスを活性化させる取り組みとして、多摩祭での T ボール交流大会も大きな意味があると考えられます。

子どもの育ちを地域で見届ける「大泉こども食堂」プロジェクト

加藤　悦雄　准教授
(家政学部　児童学科)

1. 活動内容

「大泉こども食堂」プロジェクトは 2016 年度から活動を開始し、今年度 4 年目を最終年と位置づけ活動してきた。子どもの貧困対策や居場所支援の一環として、全国的な広がりをもつ子ども食堂を学生スタッフが実践することで、子どもたちが主体的に過ごすことのできる地域の居場所づくりに寄与すると同時に、保育士や教員などを目指す学生が体験的・実践的に学ぶ機会をつくり出すことを目的としている。4 年間を通算すると 48 回程度の活動を実施し、のべ 750 名近くの子ども・保護者等の参加を得ることができた。

2019 年度は、4 月 27 日、5 月 25 日、6 月 29 日、7 月 27 日、8 月 31 日、9 月 14 日、10 月 26 日、11 月 9 日、12 月 28 日、1 月 18 日、2 月 22 日の計 11 回活動を実施した。毎回 2 年生を中心に 5～6 名の学生が参加し、15 名程度の子どもや保護者が利用した（なお、もっとも多い日は 30 名位の親子が利用した)。地区児童館職員や主任児童委員などを介して、気になる子どもに直接声をかけるなどの働きかけも行った。学生は 10:30 に現地集合し、環境づくりや調理など準備を開始する。食事を提供できる時間帯は 12:00～14:00 の 2 時間であるが､学生は早めに来た子どもとの関わりも進めていく。16:00 頃を目安に活動を終了し、子どもたちを見送った後、その日のふり返りを行った。

地域における協力者をご紹介する。主任児童委員の木寅さんに気になる子どもを複数回連れてきていただいた。調理ボランティアとして毎回赤沢さんにご協力いただいた。山口トマト農園の山口さんから野菜を提供していただいた。元文部科学大臣の田中さんから新潟のお米を提供していただいた。皆さまにこの場を借りて深く感謝申し上げます。

次に、広報に関わる活動として、①TAMA 映画フォーラム特別上映会『こどもしょくどう』スペシャルトーク(2019 年 7 月 20 日ベルブホール)登壇、②せたがや子どもの食応援団交流シンポジウム(2020 年 2 月 16 日国士舘大学メイプルセンチュリーホール)登壇、さらに、③日本経済新聞夕刊「子ども食堂地域をつなぐ」(2020 年 1 月 28 日)にコメントを寄せる等の機会を得ることができた。

2. 参加した学生の経験と気づき

① 子どもの育ちに関する気づき

「男の子は楽しいことを見つけると何度も何度も繰り返していた。その様子を見ていて､『この子にとってこの世界はまだまだ新しいことばかりなんだな』と思った。幼児期の経験は今後のその子自身に大きく関わることだと思うので、様々な体験ができるように周りの大人が援助する必要があり、わたしも子どもと関わる中で援助の方法を身に付けていきたい｣。｢普段、無邪気に遊んでいる子どもを見ているせいか、今回は大人しく百人一首をしている子どもの姿をみて大きくなったなあ、と感動してしまった。去年の 1 月頃から 5 回子ども食堂に参加し、今回で 6 回目になるのだが、1 年ほどで子どもはこんなに成長してしまうんだと驚いた｣。

② 地域の居場所として子どもや保護者にとっての意義に関する気づき

「A 親子がいつもより明るい様子だった。『聞いて！進路が決まったの』と教えてくれた。学校の先

生への不満や進路への不安を聞いていたため、安心できる出来事が起こってよかったと感じた」「近所の方がお手伝いに来てくださったり、子どもたちのつながりを見ていると、地域に密着した活動だと感じた。また、保護者同士でのつながりを求めて来られる方もいて、コミュニケーションや人とのつながりを広げられる場でもあるなと思った。子どもたちと関わる中で、保護者の方ともコミュニケーションを取っていきたい」。「子どもたちがとにかく元気で、口も達者なため、最初は振り回されてしまった。ひっぱったり、悪口を言ってくる子どももいて、注意すべきか迷った。子どもたちが普段学校などで我慢していて、ここの場所だからこそ言えることがあるのかもしれないと思ったが、子どもたちの間でこういったことが行われていたときは、言うべきだと思う。相手の気持ちを考えることを伝えることができる言葉かけをしたい」。

③　調理等の経験からの気づき

「作った料理を『おいしい』と食べてもらえて嬉しかったです。豚肉を使う料理の際は、よく熱を通して、食中毒などに気を付けなければいけないと思います」。「初めて本を見ながら肉じゃがをつくった。薄く味付けをしてしまったため、煮込んでも味が薄く、調味料を足した。時間が経つにつれてかなり味に変化が出ることを学びました」。「男の子は、9 時頃に自分で作った朝食を食べたため、お腹がすいていないと言っていたが、昼食の前に身長の話をしていて、『たくさん食べて大きくなる』ということになり、すべて食べないとデザートを食べてはいけないというルールのようなものができた。すると男の子はほんとうにすべて食べていた」。「他の専攻の学生など、話したことのない人とも協力して昼食を作ることで、たくさん話をすることができて良かった」。

さいごに―子どもたちより

最終日に寄せられた子どもの声を紹介する。「ありがとう、大泉こども食堂。豚のしょうが焼き、とってもおいしかった！わちゃわちゃしていて、食堂らしかった。わたし皆勤賞取ったよ。子ども食堂のおかげで思い出たくさんできた」。「ごはんをつくってくれて、ありがとうございます。ここのごはん、おいしかったです。また近いうちにあえたらあいましょう」。

写真①厨房の様子　②大泉こども食堂の外観　③ビーフシチュー　④とんかつ　⑤食事の一コマ

大妻囲碁フェスタ　ー坂の上の街を囲碁で盛り上げるー

川之上　豊　教授
(家政学部　児童学科)

スポーツ教育研究室では昨年に引き続き、年齢・性別・国籍・障がいの有無を問わず楽しめるゲームである囲碁を通して地域交流を図ることを目的に囲碁大会を実施した。開催するにあたり、千代田区・(公財)日本棋院にご後援を、九段商店街振興組合には協賛を、また日本棋院子ども囲碁サロン支部に協力を頂き開催した。

開催状況については、令和1年11月10日(日曜日)G棟311教室で10時～16時に実施した。参加者数については、開催日が天皇陛下即位パレードの延期日と重なったこともあったのか、キャンセルの方もおいでになり、最終的に参加者は12名（囲碁大会6名(子ども2名と大人4名)、入門教室6名）と昨年より少なかった。なお、入門講座については　原　幸子棋士に、囲碁大会については日本棋院普及事業部部長　一宮　正人氏にご指導いただいき実施した。

今回は囲碁大会・入門講座実施前に、参加者・学生・スタッフとの交流を促すために「自己紹介とじゃんけんゲーム大会」(写真1)を20分程度実施した。このことで交流や楽しさが深まり、また、囲碁入門(写真2)では原様の、囲碁大会(写真3)では一宮様の熱心なご指導もあって、参加者からは「とてもわかりやすく楽しかった」「楽しい時間を過ごすことができて大変良かった」等の感想もあり概ね好評であった。なお、じゃんけん大会や囲碁大会では九段商店街振興組合からご提供いただいた賞品(写真4)を勝敗に応じて授与した。

今後も地域の方々ともっと交流し、楽しさが深まるような方法で実施できるようにしたい。

写真１：参加者の方々と学生との交流様子

写真２：囲碁入門の様子

写真3：囲碁大会の様子

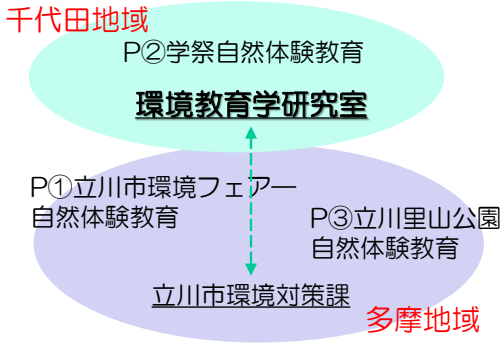
写真4：九段商店街振興組合から提供された賞品の一部

千代田&多摩地域　子供自然体験教育プロジェクト

甲野　毅　准教授
(家政学部　ライフデザイン学科)

【目的】

本プロジェクトは、環境イベントの参加、自然体験教育プログラムの企画・実施、大妻祭への参加の３つの環境教育の実践からなる。子供の成長にとって自然体験は重要な役割があるとされているが、現在の子供たちは自然と触れ合う機会が減少しており、自然との距離が開いている状態にあると言える。この問題を解決するために、私達ができることは子供達に少しでも自然との触れ合うことができる体験機会を提供することである。また、このプロジェクトは学生が主体となって行うことから、調査、企画、実践の手法を学ぶ良い機会になると考える。そして最終的に、地方自治体と協働して実施し、大妻女子大学のキャンパスがある千代田地域、また多摩地域の自然環境に貢献することも重要な目的である。



プロジェクト概要図

【活動内容】

環境イベントの参加(P①)では、立川市の環境イベント開催主旨に従い、環境教育学ゼミナール内で自然体験教育プログラムを企画し、実践する。与えられたイベントスペース内で行い、来場者に対してプログラムを実施し、環境の大切さを伝える。自然体験教育プログラム(P③)では、地域のニーズに合わせたプログラムを自治体と協議しながら、学生が最初から企画、計画を行なう。そして自然豊かな都市公園において、参加者を募集して実践する。大妻祭(P②)では、来訪者に、学生が実習で訪れた妙高高原の里地・里山の現状を、五感を通して体感してもらいながら、理解してもらうために、企画、実践を行う。立川市環境フェアの詳細を示す。

千代田＆多摩地域　子供自然体験教育プロジェクト実施全体工程

日程	内容
5月	立川市環境フェア―企画
6月2日	立川市環境フェア―実施
6月15日	立川里山公園自然体験教育フィールドワーク※雨天中止
6･7月	立川里山公園自然体験教育企画
8月1日	立川市環境対策課事前協議
9･10月	妙高高原自然体験論参加　大妻祭自然体験教育企画･実施
10月	立川里山公園自然体験教育企画
11月4日	立川里山公園自然体験教育フィールドワーク
11月23日	立川里山公園自然体験教育実施※雨天中止
12月	地域連携プロジェクト振返り

（立川市環境フェア）立川市環境フェアは、「多くの方に環境の大切さを知っていただくとともに、環境に配慮した生活や行動を促すきっかけを提供すること」を目的として実施している環境イベントである。環境教育学ゼミナールは４年前から、本環境イベントに出展するようになり、今年で５回目の参加となる。毎回来訪者に向けて、環境への意識を高めるような参加型のイベントを実施している。令和元年の今年は、６月２日の日曜日に開催され、子供達を対象に「ペットボトルラベルを活用した

しおり作り体験教室」を提供した。海洋プラスチック問題の現状と、その解決策の１つとしてペットボトルリサイクルを確実に実施することの大切さを伝えることをテーマに掲げ、炎天下の下、子供達に環境教育活動を実践することが出来た。この環境イベントはゼミ生にとっても、非常に刺激的な学びの一日となったようであり、掲げたテーマを伝えることの難しさを実感したようであった。

ペットボトルリサイクルの実践　プラチックごみの現況開設とクラフト体験

【結果】立川市環境イベントでは、子供達を対象に「ペットボトルラベルを活用したしおり作り体験教室」を提供、50 名を超える子供達に環境教育活動を実践することができた。大妻祭では教室を体感スペースに演出し、80 名の来訪者に里地・里山を体感できるプログラムを実施した。プログラムは、妙高高原の自然環境を伝えること、そして学生が作った炭を活用した脱臭剤作り体験であった。そして自然体験教育プログラムでは、都市公園を４つのゾーンに分け、立川市と打ち合わせをして準備を進めたが、残念ながら雨天のため中止となった。

プロジェクト成果の第１に、子供への自然体験教育を行うことで、開いてしまっている自然との距離を縮め、子供達の成長に良い効果を与えたと考える。例えば、子供の集中力が高くなる、また優しく思いやりを持つようになるなどの内的状態を変化させる可能性がある。また他人に優しくコミュニケーションをとることができるなど外的状態を変化させることもある。第２に、学生自身が主体となって行うことで、学生自身が調査、企画、実践力を身につけることができたであろう。そして最後にそれぞれのキャンパスのある地域において、子供達の自然体験機会を創出することができたと考える。

大妻祭自然体験教育

制作したパネルや動画映像を使用して妙高高原の里地・里山の現状を説明

立川里山公園自然体験教育

ゼミ内で企画内容を精査し、立川市と協議　現場でのフィールドワーク

多摩 NT における子どもと中高年の居場所づくり

炭谷　晃男　教授
(社会情報学部　社会情報学科　情報デザイン専攻)

1 経緯

多摩ニュータウンの再生を構想した地域プロジェクトを実施。少子高齢化が急速に進む多摩ニュータウンであることから、子どもたちと高齢者を対象にした 2 系統のプロジェクトを推進した。

子どもを対象とした寺子屋プロジェクトは八王子市教育委員会等と連携して地域の子どもたちの学習支援及び居場所づくりの活動を行った。学習面で一度つまずいた子どもの復習の機会や学習習慣が身に付いていない子どもたちにきっかけを提供する。楽しく学べる「子どもの居場所づくり」の提供に心掛けた。さらに、みなみおおさまの会等と連携して、南大沢の地域の「中高齢者の居場所づくりプロジェクト」を実施した。このように多摩ニュータウンの住民の手による子ども達と中高年の交流の機会を促進し、両者の繋がりを目指すプロジェクトである。

2 プロジェクト

a 子どもの居場所プロジェクト：寺子屋

多摩キャンパス周辺の八王子市立松木小学校、長池小学校で月に 1 回程度土曜に学校の教室や体育館を借りて子どもの活動を支援する寺子屋活動を(表-1)の通り 9 回実施した。しかし、3 月は新型コロナウイルス拡大により予定していた 3 月 23 日のイベントは残念ながら中止せざるを得なかった。

寺子屋の活動内容としては寺子屋学習教室(漢字検定)、料理教室、ボッチャ、プログラミングカー、ミサンガ、アニメーション、万華鏡教室等を実施した。また、5 月と 9 月には大妻女子大学のバルーンアートサークルの「ばろん。」にも参加してもらった。

(表－1)寺子屋の開催日程と内容

5 月 11 日	工作教室：カーネーション作り
6 月 22 日	工作教室：ミサンガ
7 月 6 日	工作教室：プラネタリウム
9 月 7 日	漢字検定摸擬試験
10 月 19 日	漢字検定摸擬試験
11 月 23 日	ボッチャ
12 月 7 日	プログラミングカー、ボッチャ
1 月 18 日	プログラミングカー、ボッチャ
2 月 22 日	プログラミングカー、ボッチャ

ボッチャは、パラスポーツの 1 種であるが、障がい者スポーツとしてだけでなく、高齢者からどの年齢の人でも、障害の有無を超えて楽しめるユニバーサルスポーツとしてボッチャが定着してほしいと願っている。地域スポーツとしてボッチャを普及させたい思いから、ゼミで取り組んだ。11 月に実施したボッチャ体験会では、中学生のチームがボッチャの上にボッチャを重ねて載せる技であるライジングを成功させた。

ミサンガ

母の日のカーネーション

ボッチャのライジング

b 高齢者の居場所プロジェクト：いきいきサロン

月 1 回程度、いきいきサロンとみなみおおさまカフェの 2 つの高齢者のサロンが行われている。しかし高齢者の居場所づくりについては 10 月に会場を提供していた企業が撤退し、そのため 11 月からは高齢者の居場所づくりに学生は参加できなくなってしまい、事実上運営が困難になった。2 月には近くの中学校で会場の提供をして頂くこととなった。しかしながらプロジェクトは新型コロナウイルスよる緊急事態宣言等により活動を休止せざるをえなくなったのは大変残念です。

次年度は、多摩ニュータウンの住民の手による子ども達と中高年の交流の機会を促進し、両者の繋がりを目指すプロジェクトを目指していきたい。

3 効果

①参加学生には計画、実施、振り返りという PDCA 体験する貴重な社会的体験となった。②こどもたちに教えるという貴重な体験をもつことが出来た。③このプロジェクトを通じて大学での学びの意義にリアリティを持つことが出来たと考える。

謝辞　学生達にこのような地域社会で、他の団体とのコラボレーションを通じて、子どもや大人にかかわる機会を与えて頂いた「大妻女子大学地域連携プロジェクト」に感謝申し上げる。

むささび食堂：食事がつなぐ地域の輪

田中　直子　教授
(家政学部　食物学科)

1. 本プロジェクトの背景と目的

【背景】

本プロジェクトは、大妻女子大学狭山台校と入間市との地域交流から始まったものである。狭山台校の閉校にともない、平成 28 年度からは正式な地域連携プロジェクトとして千代田校に通う 3 年生が参加している。

【目的】

本事業で取り組む「むささび食堂」は、「むささび自習室」の関連事業として行なわれている。「むささび自習室」とは、子どもだけで過ごす時間の長い子供たちが自由に集い、地域の大人や子どもとの交流を通して自分の居場所を見つけるための事業である。「むささび食堂」はその事業の一環として、子供たちが大学生や地域の大人と楽しく料理をしながら、自分で作ることの楽しさや、食への興味、食に関する昔ながらの知恵などを学ぶ場となっている。そんな「料理を通して広い世代が交流し輪を広げていく場所」が「むささび食堂」である。

大学生にとっては、日頃接する機会の少ないお年寄りの知恵を借りながら、子どもたちと食を通して繋がる体験をするプロジェクトである。大学生が食を通した地域の共生を肌で感じ、その中で自分ができることについて考える機会となることを目的としている。

大学生が多世代交流の場で学ぶ

核家族化が進み、地域のつながりも薄くなる中、同世代以外の人間と接する機会は少なくなっている。大学生にとって、むささび食堂で活動する大人や地域のお年寄り、そしてむささび食堂を訪ねてくる子どもたちとの交流は、大きな財産となると考えられる。また、栄養士養成課程での学びを活かす具体的な道を知ることは、彼女たちの卒業後の長い人生に対しても重要な体験となると期待できる。

大学生と子どもたちとの交流

大学生は、大学で様々な世代の食と栄養について学ぶが、子ども達と共に料理をし、盛り付けをし、食べ、片付けをする経験は他ではなかなか得られない。不特定多数の子どもたちと接し、「子どもたちが喜ぶ」企画や料理がどのようなものか、子どもたちに伝えるにはどうしたら良いかなどを実際に学ぶ場となると期待される。

2. 本プロジェクトの内容

プロジェクトの構成

むささび食堂の活動は、青少年活動センターの行うむささび自習室の 1 つの企画である。青少年活動センターのスタッフ、地域ボランティアスタッフ、大妻女子大学食物学科の学生が協力して行った。

活動日：6/9 (日)、8/17 (土)、10/20 (日)、11/17 (日)、2/2 (日) の計 5 回

活動場所：入間市青少年活動センター

活動内容

(1) メニューの検討、試作、決定：実施日までの間に学生で相談して行う。

(2) 事前準備：前の日の夕方から夜に現地入りし、食材の購入および事前準備を行う。

(3) 当日の活動：調理師の方と相談しながら、子供たちや地域ボランティアへの作業の説明、調理配膳指導を行い、皆でともに活動を行う。午前中は昼食、午後はおやつの準備を行う。

3. 2019 年度の活動報告

予定していた 6 回の活動予定のうち、最後の 3 月 21 日は新型コロナウイルス対応のため中止となった。計 5 回の活動内容を表にまとめた。参加者数は、天気による変動は若干あったものの、ほぼ一定しており、活動が定着したことがうかがえた。地域からの食材提供も多く、活動が地域に根付いていることもうかがえた。メニューは各回の学生に任されているので、回ごとにバラエティーに富んだものとなっている。地域からの提供食材のあれこれもメニューの多様性に一役かっている。

表 1. むささび食堂の活動まとめ

日にち	6月9日(日)	8月17日(土)	10月20日(日)	11月17日(日)	2月2日(日)	3月21日(土)
参加者数	81人	56人	43人	70人	69人	
メニュー	煮込みハンバーグ 野菜たっぷりスープ サラダ ガトーショコラ	夏カレーライス オクラとコーンの和え物 パスタサラダ バナナマフィン	ラザニア トマト煮込み 季節の野菜和え物 オニオンスープ ガナッシュ	マーボー丼 大根もち 野菜スープ ミルクティーゼリー 生クリームのせ	ウチイレ ほうれん草入り卵焼き トマトサラダ フルーツポンチ	活動中止
大妻女子大学 学生スタッフ	6人	4人	5人	4人	6人	

図 1. 活動の様子

4. 2020 年度に向けて

新型コロナウイルス感染拡大にともなって、地域の人々が集まって活動することが難しくなっている。子どもたちが家族で過ごす時間が増え、経済格差も広がると予想される中、地域が子どもたちをどのように支えていけるか、「食を通した地域の交流」がどのように実現できるのか、2020 年度の課題は多いと思われる今日この頃である。

神保町の出版と書店を元気にするプロジェクト 2019

深水　浩司　常勤特任講師
(教職総合支援センター)

千代田区神保町は、日本国内において出版社や書店等が集結する特異性を持つ日本屈指の街である。神保町が育んできた出版文化や書店文化（古書店を含む)、町の文化を、より広い年代や層に周知し利用していただくために、町の活性化を目指す組織と大学機関（大妻のみならず周辺の大学も含め）が連携することは大きな意義があると考える。

本プロジェクトは昨年度に引き続き（神保町の出版と書店を元気にするプロジェクト)、書店と出版を軸に、地域や本学学生、教職員との連携を強めつつ、自由な発想をもとに考え活動する企画を立てた。具体的には、神田古書店連盟とのイベント開催（神田古書まつりのイベント）を主とした。当初の計画では、大妻女子大学でのイベント(「出版を知る(仮)」をテーマに、出版界からの講演者を想定)も計画していたが、担当いただく方は決まったものの、開催時期について調整が十分にできず、残念ながら中止とした。唯一確実に実施できたのは、神田古本まつりでのイベント（神田古書店連盟との)で、多摩校「図書館サークル OLIVE」のメンバーを中心に実施した「和装本メモ帳づくり」のワークショップである。今回の年次報告書では、このイベントを中心にまとめるが、やむを得ず中止を決断した講演についてもその概要を報告する。

1 ワークショップ「和装本メモ帳づくり」(11 月 2・3 日、10 時～15 時)

毎年秋に開催されている「東京名物・神田古本まつり」は、2019 年で 60 回目を迎えた。昨年より、主催する「神田古書店連盟」と連携をとり、東京古書会館開催イベントととして実施された。神田古本まつりは、2019 年 10 月 25 日(金)から 11 月 4 日(月・祝日)までの開催で、開催期間最初の週末が最も多くのイベント参加者を得ることができるが、会場である東京古書会館の都合で、最終日近くの週末に開催することになった。

イベント会場は、東京古書会館 2 階にある「情報コーナー」で、着席で 15 名程度を収容できるスペースを利用した。作業をする都合上、できる限り広くひとり分のスペースを確保必要性があったので、今回は 10 名を定員として参加者を募った。昨年のワークショップは、専門家に依頼して「本の修復」を実施したが、今回は、深水が指導と進行を担当し、学生 2 名でのサポートを取った。参加者 10 名規模でも、和装本メモ帳を作るためには 2 時間程度が必要なので、10 時～12 時と、13 時から 15 時の 2 回に分けて実施した。各回とも定

古本まつりイベントポスター

員を満たし、参加者は20名であった。

昨年は、事前に参加者から予約を頂く方法を取ったが、今回は、ポスターや SNS でワークショップを告知し、当日開催回1時間前から受付ける方法を取った。残念なことに、最終的には5名の申込を断る結果となった。

サポート担当の学生は、初日と2日目では異なり、初日は2名、2日目は1名の都合が悪くなり1名のみでのサポート体制となった(所属と名前は後述)。

和装本綴じ穴あけ作業

2 講演会「出版を知る(仮)」(大妻女子大学千代田校内で講演予定)

昨年は、講演会「古書を知り、古書を楽しむ　書物と神保町の歴史を学ぶ」を大学内で実施した。本年は、テーマを古書（古書店)から出版に変更し、出版界と神保町を知るための講演会を予定していた。講演者には、野上暁氏（元小学館クリエイティブ代表取締役 日本ペンクラブ理事 東京純心女子大学客員教授）に依頼し、テーマも「出版社から見た神保町―出版の歴史と現状をみる―」として準備と調整を進めていた。2020年の初めに実施予定だったが、どうしても講演者の予定と大学施設の利用可能予定とのすり合わせがつかず、断腸の思いで中止することとした。講演を依頼した野上氏は、小学館で出版に携わった経験が長く、同時に絵本作家でもあり、更に神保町自体についての知識も深く、神保町と出版界を熟知している一人でもある。2020年度での講演も可能とのことで、次の機会に実施できるよう準備を進めていきたい。

3 終わりに

今回のプロジェクトは、残念ながら神田古本まつりにおけるイベントのみの開催となってしまった。しかしながら、神田古書店連盟の方々とは、昨年に引き続き連携を保つことができ、野上暁氏と、氏が所属する「日本ペンクラブ」や「日本出版クラブ」との繋がりを新たに持つことができた。地理的に本学と神保町との距離は少しあるものの、神保町をはじめとする周辺地域に、大学がどのように貢献できるか、大学教育や学生を通じて、どれだけ有意義な関係を相互に持てるかを、今後も模索していきたい。

最後に、直接イベントでお手伝い頂いた学生さん（人間関係学部の丸山みきさん、小俣舞夏さん、足立美樹さん）には、適切なサポートを頂くことができた。神田古書店連盟役員であり広報担当の大谷仁様には、イベントについて明確な助言と会場の手配でご尽力頂いた。残念ながら実現できなかった講演だが、野上暁氏には打合せを通じて講演会の内容など、具体的な示唆を多く頂くことができた。これらの方々のご協力を頂き、本プロジェクトを終えることができた。感謝申し上げる。

能登の里海を守る：地域の活性化と海育普及プロジェクト

細谷　夏実　教授
（社会情報学部 社会情報学科 環境情報学専攻）

1. はじめに

四方を海に囲まれた日本では、昔から海の恩恵を受けて生活を営んできている。近年、地域に残る里海の環境を保全・利活用しながら、持続可能な海との関わり方を考えていくことの重要性がますます注目されてきている。そのためには、貴重な里海が残る地域の人々との交流や海に関わる実体験などを通して、自ら海の大切さを理解し活用できる人材を育てること（海育：うみいく）も重要である。

私たちのゼミでは、5 年前から、世界農業遺産でもある石川県能登半島の穴水町との交流を行い、地方自治体や地域の里山里海保全に尽力する人々と連携する体制作りを行ってきた。昨年度はこれまでの活動がきっかけとなり、本学と穴水町との連携協定締結も行われた。

本プロジェクトでは、これまでに培った連携体制を多いに活用し、学生たちと現地で行ってきた活動の成果も交えながら、里海の大切さを広く知ってもらうと共に、その保全と活用に向けた理解を広げるための情報交換と発信の場づくり、さらに子どもたちを中心とした身近な視点・体験からの海洋教育の広がり（海育の普及）をめざした。

具体的には、学生と共に行う現地でのフィールドワーク、大学祭やかき祭りでの活動紹介、さらに、海育普及のための取り組みである穴水町の向洋小学校の児童と協同した「うみいくカード」作成、穴水小学校での里海スクールの開催を計画した。

蒸して炒った椿の葉を手もみしてお茶にする様子

2. 活動内容

本年度は、以下のような活動を行った。

1）現地でのフィールドワーク～地域活性化につなげるために～（2019 年 8 月 5～9 日）

ゼミで学生たちが能登について事前学習を行った上で、8 月に能登半島・穴水町でフィールドワークを行った。活動としては、鹿波椿保存会会長の楠氏からお話を伺い、地元の穴水高校の生徒と共に学生が椿茶作りを手伝った。さらに、ボラ待ち櫓の復活に向けて活動している方、地元の食材を活かしたかあさんの学校食堂や農家民宿などを運営している方など、地域活性化に尽力している方たちからもお話を伺った。

大妻祭で能登の紹介や特産物の販売を行った

2）大妻祭出展（2019 年 10 月 26～27 日）

ゼミでは、4 年前から大学の文化祭に「能登展」を出展し、能登でのゼミ活動の様子や現地の紹介を行うと共に、地元の物産販売などを行ってきた。今回の能登展には穴水高校の校長先生と先生 1 名・

生徒 3 名も参加し、完成した椿茶をはじめとする地元の特産物などの販売や、クイズ形式での穴水町の紹介、ポスターによる活動報告などを行った。

3）うみいくカードの作成（2019 年 10 月～2 月）

穴水町にある 2 つの小学校のうち、向洋小学校の児童と共に牡蠣学習の体験を活かした「うみいくカード」を作成した。子どもたちは「ふるさと教育」の一環として、地元の牡蠣養殖の現場見学に行く。その際に学んだことを絵と文章にまとめてもらい、各自の絵と文章を 1 枚ずつのポストカードにした。

完成した「うみいくカード」

4）穴水町雪中ジャンボかきまつりでの大妻ブース出展（2020 年 2 月 8～9 日）

穴水町の一大イベントである雪中ジャンボかきまつりにおいて、昨年に引き続き大妻ブースを出展した。大妻ブースでは、これまでの能登での活動を報告したパネル展示、椿茶の試飲などを行うと共に、向洋小の児童が参加してうみいくカードの配布を一緒に行った。

大妻ブースには、多くの来場者があった

5）里海スクール「ナマコを学ぼう！」の実施（2020 年 2 月 10 日）

雪中ジャンボかきまつりの翌日(10 日)に、穴水町のもう一つの小学校である穴水小学校の 5 年生を対象に、地元の特産物であるナマコを用いた里海スクールを開催した。昨夏に小学校に備えられたタブレットを活用し、モバイル顕微鏡を装着することで、ウニの殻やナマコの骨片の観察などを行った。

3. まとめ

上記に説明したようなさまざまな活動を通して、里海の大切さの周知や保全と活用に向けた情報交換と発信の場づくり、身近な視点・体験からの海洋教育の広がり（海育の普及）を行うことができたと考えている。活動は地元でも注目され、新聞やケーブルテレビでも度々取り上げられた。

それぞれの活動においては、アンケート調査も行った。その結果、参加した学生、イベントの来場者、小学校の子どもたち、みんなが活動に興味を持ち、活動を通じて能登の海やそこにすむ生きものをより深く知り、楽しんでくれたことが明らかになった。

以上のことから、本プロジェクトにより、当初の目的は十分に達成されたと考える。

今後も里海保全や地域の活性化、海育の普及に向けて、子どもたちを含めた地域の方たち、学生たちと力を合わせて、いろいろな取り組みを行っていきたいと考えている。

体験から学ぶ防災～防災と言わない防災を目指して～

堀　洋元　准教授
（人間関係学部　人間関係学科　社会・臨床心理学専攻）

本プロジェクトは、ゼミ学生が行う出前防災講座として行われ、平成 28 年度からの継続で 4 年目であった。

初年度は「女子大学生の視点を活かした出前防災講座」というプロジェクトテーマで多摩市総合福祉センター、多摩市社会福祉協議会と連携して活動した。その成果は、多摩市総合福祉センターで開催された福祉大会において「女子大生による出前防災講座～大妻女子大学のゼミ生が独自の視点から考えた体験型の防災講座！」として行われた。2 年目は「学生の視点と地域のニーズを活かした出前防災講座」として多摩市総合福祉センター、多摩市社会福祉協議会と連携し、地域住民への事前アンケート調査をふまえて実施した。その成果は、福祉フェスタ 2017（多摩市総合福祉センターで開催）において「今日からできる 5 つの防災対策」として行われた。3 年目は「唐木田発：学生と地域でコラボする体験型防災講座」として、多摩市社会福祉協議会、ほっとネットしょうぶ（唐木田・中沢・山王下等地区地域福祉推進委員会）の有志と連携して活動した。その成果は、大妻多摩祭（大妻女子大学多摩キャンパスで開催）の展示企画のひとつとして、体験型防災講座を行った。そして今年度は「体験から学ぶ防災～防災と言わない防災を目指して～」として、昨年度に引き続き多摩市社会福祉協議会、ほっとネットしょうぶ有志と連携して活動を行った。

継続して本プロジェクト活動を行った結果、2 つの成果が得られた。ひとつはプロジェクト活動を継続して行うことにより、緊密な地域連携を行う土台が築かれたことである。もうひとつは学生たちが防災への取り組みを個人の知識や体験だけでなく、ゼミとして築き上げたキャリアを卒業研究や就職活動などのライフキャリアを考える際にも活かしていることである。

〔目的〕

プロジェクト活動 4 年目である今年度は、ゼミでの体験学習や学外での防災イベントに参加して学んだことから防災に関するアイデアを形にして､大妻多摩祭にて体験型防災ワークショップを行った。今年度プロジェクト活動のサブタイトル「防災と言わない防災」を目指して、単に防災のためだけでなく、日常生活とリンクした防災への取り組みとなることを志したプロジェクト活動を実践していった。

〔プロジェクトの概要〕

1. 防災に役立つアイデアの体験学習（学内）

社会・臨床心理学セミナーⅠ（ゼミ）の中で、防災に役立つアイデアを学生と教員で出し合い、実際に体験した。具体的には、防災食の食べ比べとアレンジ、VR （Virtual Reality：仮想現実）による火災からの避難体験、PET ボトルを利用したランプシェードづくりを行った。防災食のレシピをアレンジすることで、高齢者の方でも食べやすいようなお粥風にできたり、乾パンを砕いてスープに入れてクルトン風にしたり、試行錯誤しながらも柔軟な発想で防災食をよりおいしくする気づきを体験した。また、企業の方にご協力いただき、VR による火災避難体験を行うことで、単に臨場感があるだけでなく、体験後に防災について真剣に考えるきっかけになることも分かり、防災ワークショップ

でも取り入れることになった。

この学びを通して、学生自身が身についたこととして「様々な防災食や道具を知ることができた」、役立ったこととして「防災食を食べてもらうことで、マイナスイメージから少しでもプラスのイメージに変えるきっかけをつくれた」をあげていた。

2. 防災ゲーム体験イベントへの参加（学外）

学内だけでなく、「防災ゲーム Day in そなエリア東京」に参加し、防災教育で用いられているさまざまな防災ゲームを体験した。カード型のものからボードゲーム型、館内を利用したアクション型まで、多彩な工夫をもとに防災ゲームが作られており、グループに分かれて体験した後で、防災ワークショップに取り入れられそうなアイデア、実施可能なゲームなどを検討した。

この体験的学びの結果、「クイズの作成段階で様々な書籍を読み、訪れた方々に各問題の解説ができるよう念入りに準備したことで、正しい防災知識を再度身につけることができた」という主体的学びが促進されていた。

3. 大妻多摩祭での体験型防災講座の実施

多摩市社会福祉協議会、ほっとネットしょうぶ（唐木田・中沢・山王下等地区地域福祉推進委員会）有志の方々にご協力いただき体験型防災ワークショップを実施した。防災食の試食や防災クイズ、VR 体験、ペットボトルの有効活用、段ボールベッドや防災備品の展示など、参加者に興味を持ってもらえるような身近なものを取り上げて体験してもらう有意義なイベントとなった。

段ボールベッドの展示を通して、「実際に避難場所生活を体験することで、より現実的な快適な環境づくりにおける解決策が浮かぶことを知ったり、防災展示を通して人に伝える能力が身についていた」という成果が得られた。

写真＝防災ワークショップの様子

（上段左から防災クイズ、防災食体験、ランプシェード、下段左から VR 体験、段ボールベッド）

〔プロジェクトの効果と今後の展望〕

学生は、このプロジェクトに主体的に参加することでさまざまな経験を整理できた。そして防災ワークショップとしてその成果を形にすることで、体験による学びを活かすことができたと言える。

本プロジェクトはゼミ 3 年生を主体に実施しているため、就職活動においても防災の視点で考える機会になっている。地域の方々だけでなく、企業との関わりも含めてユニークな視点を研鑽する場となることを期待している。

多摩市における街区公園改修に関するプロジェクト

松本　暢子　教授
(社会情報学部　社会情報学科　環境情報学専攻)

1. はじめに

多摩市はニュータウン開発から約 50 年を経過し、急激な少子高齢化に直面しています。高齢者への対応とともに、子育て世代の多摩ニュータウンへの住み替えの促進が必要となっています。昨年まで、多摩ニュータウンの社会的資源である「子育て世代の居住地としての特性」や「良質な住宅ストックの存在」を活かして、「多摩で子育てしたくなる」魅力の発見と創造をめざして、「子育て家族」の意向調査や市民とのワークショップに参加し、子育て家族が多摩地域の自然や緑を高く評価しており、公園や緑地の利用に関心が高いことを見出しました。

そこで、2019 年度地域連携プロジェクトでは、子育て家族の居住ニーズで重視されている「公園」に注目し、多摩市公園緑地課による「多摩市街区公園改修に伴う地域ワークショップ」に学生および教員が参画し、市民とともに意見交換しました。これは、これまでのワークショップの成果「子育て家族の住環境では自然環境が重視される」ことを前提とし、身近な環境としての「街区公園」の実態を知り、今後の在り方（居住者の利用の拡大・公園施設の管理・行政と市民の協働など）について考え、多摩市による改修の方針・設計を進めるためのとりくみです。

2.「多摩市街区公園改修に伴う地域ワークショップ」

今年度は、関戸地区・愛宕地区を対象として、コミュニティセンター愛宕かえで館（9/28　10/19　11/16)、関戸つむぎ館（10/5　11/2　11/23）において、各 3 回のワークショップが開催されました。ワークショップの内容は、以下の通りで、その運営等に携わりました。

第 1 回　街区公園の施設老朽化等改修の必要性（説明）課題やニーズの意見交換

第 2 回　課題の共有と対応についての意見交換（各公園の利用実態と課題、利用希望）

第 3 回 改修案のとりまとめ（改修に向けての意見交換）

最終的には、意見の集約と改修案に向けての話し合いが行われました。学生の参加は、会議の運営とともに、参加者の少ない若年層および女性の意見として、評価される一方、学生自身にとっても地域の実態を知り、考える場となったと思います。

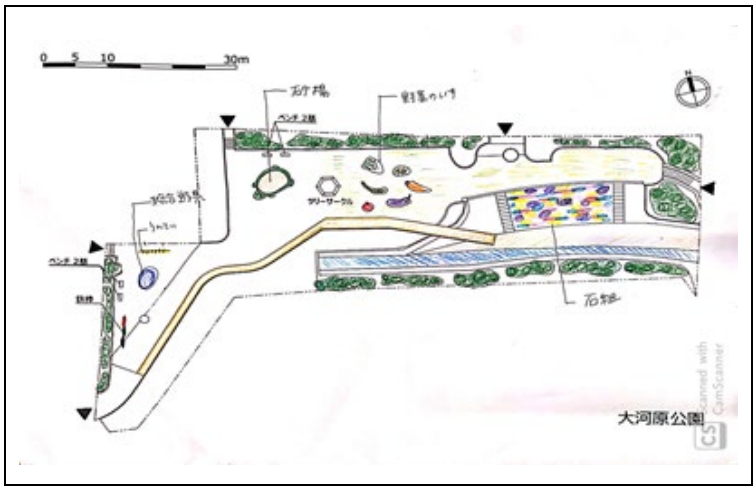


図 1　大河原公園の改修案

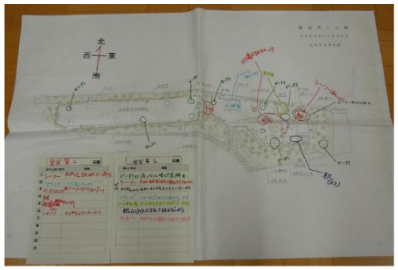
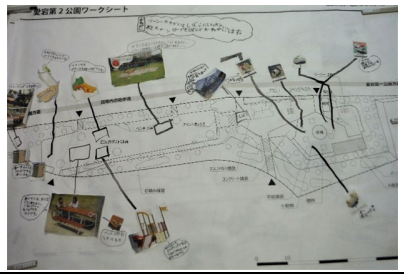
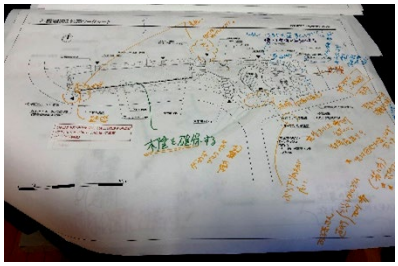
3. 卒業研究としてのとりまとめ

市民参加による街区公園の改修計画案の作成が、どのように進められるのか、こうした手法が計画案策定において有効であるかについて、卒業研究として取り組むことができました。それに伴い、多摩市立愛和小学校での改修に関わる調査

や総合学習（授業）に参加し、小学生の意見を把握することができ、小学生による改修案が作成されました。こうしたプロセスを記録し、各段階における意見の反映や進め方について、その有効性について考察することで、卒業研究がまとめられました。

ワークショップでの経験を踏まえて、現地調査を追加して実施したうえで学生の提案をまとめ、1月 14 日に多摩市環境部公園緑地課に向けて、提案の発表を行いました。この提案は、街区公園の改修方針の一部として、報告書に掲載されました。

表１　小学校での聞き取り調査の結果

愛和小学校（5年）での聞き取り調査	第三小学校（3年）での聞き取り調査	愛宕地区ワークショップでの聞き取り調査
シーソーを取り換え、下にタイヤを設置。街灯を増やす。テーブルベンチを新設する。カメを増やす。トイレを男女別にする。	今置いてあるカメの置物をスプリング遊具に取り換える。シーソーの近くに芝生を設ける。今、遊具の置かれているスペースだけでなく、砂利スペースにも遊具を設置する。ブランコ、ターザンロープ（下を芝生にする）、幼児用滑り台、テーブルベンチ、誰でもトイレを新設	広場側は大幅な改修をせず、ベンチ、かまどベンチを新設する。木陰が確保できる程度に木を伐採する。トイレを使いやすくする。また遊具スペース内の段差をなくす。ブランコ、シーソーは更新する。テーブルベンチを新設し、屋根のあるスペースを作る。照明を増やす。花壇を作る
		

4. おわりに

地域連携プロジェクトとして、多摩市（緑地公園課）による市民参加のワークショップに参加することで、学生にとって多くの経験を積むことができました。とりわけ、街区公園は身近な公園であり、日常生活での利用は多岐にわたっており、団地などの共同住宅の居住者にとっては重要な生活空間となっていること、高齢者や幼児など利用者の年代によっても利用の価値が異なることなどが理解できたものと思われます。したがって、時間帯によって利用者が異なることや利用のされ方が大きく異なることが改めて確認できました。街区公園の改修にあたっては、多様な利用者の利用実態やその希望をていねいに把握して、進めないとならないことが明らかとなりました。

写真１　ワークショップの風景

写真２　公園施設の老朽化

写真３　遊具の老朽化

からきだ匠(たくみ)カフェ～地域がつながる場所～

八城　薫　准教授
(人間関係学部　人間関係学科　社会・臨床心理学専攻)

多摩キャンパス（唐木田）周辺は病院、福祉施設、教育施設など様々な施設が存在し、身体や心に不安を抱えても安心して暮らすことのできる環境が整っています。そこで働く専門家（匠）集団が連携して吸引役となり、日頃から地域の様々な属性、世代の方々と繋がるような居場所づくりをすることで、いざという時に助け合えるような地域でありたい。そんな想いから 2017 年度 4 月、あい介護老人保健施設、社会福祉法人 楽友会、多摩市社会福祉協議会の方々との連携で活動をスタートさせ、このプロジェクト“からきだ匠カフェ～地域がつながる場所～”が生まれました。

「からきだ匠カフェ」の活動は、毎月第 4 水曜日の 15 時から 2 時間ほど、唐木田駅前のレストラン“キッチンティス”さんのご協力をいただいて開催しています。昨年度（平成 30 年度）は、2018 多摩市事例発表会にて我々の活動を「多職種・多世代でのコミュニティカフェ運営とその効果」として発表し、会場賞をいただきました。また今年度も介護医療福祉事例発表会で活動発表を行い、本学社会・臨床心理学専攻の 3 年生が素晴らしい紹介 VTR を披露してくれました。

『匠』には、もう一つの大事な意味があります。それは「誰もが何らかの匠である」ということです。匠カフェでは、こちらが企画や情報を提供するのではなく、みんなでそれぞれの匠的な才能を持ち寄ってシェアし合おうというコンセプトがあります。ですから匠カフェに参加する際には「〇〇の匠」と「氏名」が書かれたネームホルダーを付けます。「〇〇の匠」に入れる言葉は、特殊な技能といったことに限らず、自分の得意なことや好きなもの、趣味など何でもよいのです。「つながりの匠」「女子力高めの匠」「スマイルの匠」「認知症支援の匠」「けん玉の匠」「日本舞踊の匠」「タティングの匠」などなど、たくさんのユニークな匠がそろっています。お子様からお年寄りまで、様々な方々が一緒に楽しむ場所・空間として、また「共生社会」の実現に向けた本学学生の実践の場として、これからも楽しく活動を続けていきたいと思っています。

令和元年度の活動内容

＜番外企画＞授業「人間関係総論Ⅱ(地域とつながる)」に参加
第 1 回　4 月 24 日(水) 新しいつながりを作ろう！～唐木田人気スポットの情報交換など～
第 2 回　5 月 22 日(水) もしバナゲーム体験会～もしもの時、あなたならどうしますか？～
第 3 回　6 月 26 日(水) 座って気軽に背骨コンディショニング体操～身体の不調をセルフケア～
第 4 回　7 月 24 日(水) からきだ鉄道博物館～でんしゃ好きあつまれ！！～
第 5 回　8 月 28 日(水) 夏休みちびっこ企画～夏まつり～
＜番外企画＞　9 月 21 日(土) 認知症支援活動 RUN 伴多摩に「匠カフェチーム」として参加
第 6 回　9 月 25 日(水) 認知症を知ろう！～「もしも」を読んで話しましょう～
第 7 回　10 月 23 日(水) 笑いヨガ～悩みも笑いで吹き飛ばそう！～
第 8 回　11 月 27 日(水) はじめての太極拳～身体で感じましょう～
＜番外企画＞　12 月 11 日(水) 2019 介護医療福祉事例発表会にて活動発表
第 9 回　12 月 25 日(水) クリスマス会～みんなで歌いましょう～

第 10 回　1 月 22 日(水) 新年会～2020 年もよろしくお願いします！～
第 11 回　2 月 26 日(水) うたごえカフェ～楽しく歌いましょう～
第 12 回　3 月 25 日(水) 新年度に向けて～出会いと別れと～

※1 このほか、毎月 1 回程度で企画会議を行っています。　※2 2 月、3 月は COVID-19 拡大防止のため、中止としました。

4 月「人間関係総論Ⅱ(地域とつながる)」に参加

6 月の企画「背骨コンディショニング」の様子

7 月の企画「からきだ鉄道博物館」の様子

10 月の企画「笑いヨガ」の様子

匠カフェに来たらまず自分の匠カフェメンバーカードを探します。いろんな匠が勢ぞろい!!

9 月　RUN 伴多摩市に参加

♪テーマソング
「からきだ匠カフェ～笑顔の咲くところ～」

からきだの道に　百本シダレ
桜咲くこの街に　はじまる物語
からきだ通りに　咲くハナミズキ
唐木田のこの店に　集まる昼下がり
歳のせいだとか　病気のせいとか
そんなことは忘れて　笑顔咲くところ
からきだ匠カフェ　だれもが匠だね
笑顔と歌で　広がってく
世代を超えて　僕らをつなげる　架け橋さ

からきだ 匠 カフェ
since2017　at kitchen Tis

令和元年度 地域貢献プロジェクト報告

令和元年度 地域貢献プロジェクト概要

1. 趣旨

広く地域のみなさまへ本学の教育と研究成果を還元し、みなさまの多様な学習ニーズに応えるとともに、地域社会の教育、学術、文化の発展に貢献する活動の推進を図ることを目的に、その活動経費を補助する。

2. 対象テーマ

本学の教育と研究成果を地域社会に還元し、地域社会の教育、学術、文化の発展に貢献する活動。

3. 応募資格

大妻女子大学の教職員(個人又はグループ)又は教職員と学生（大学院生・短大生を含む）で構成するグループ。

応募するグループは、下記 4 つの要件をすべて満たしていること。

①本学の教育と研究成果を地域社会に還元する活動
②地域社会の教育、学術、文化の発展に貢献する活動
③千代田、多摩、中野、嵐山等で行われる、近隣住民等を対象とした活動
④在学生が主体的に参加する活動又は成果を在学生の教育に反映できる活動

4. プロジェクト支援期間

令和元年 5 月 9 日(木)～令和 2 年 3 月 31 日(火)

5. 支援額及び採択件数

支援額：1 プロジェクトにつき 30 万円を上限
採択数：数件程度

令和元年度 地域貢献プロジェクト採択一覧

プロジェクト名	代表者
働く男性女性のプレコンセプションケアの支援	川口　美喜子
多摩図書館ツアー2019 (学びのかなめ、公共図書館、学校図書館、大学図書館、そして世界の図書館を知る)	深水　浩司
大妻力による世羅町の 6 次産業化支援を区民の健康力向上につなげる地域貢献活動について	堀口　美恵子
Likio Ellinidon：ギリシャ伝統舞踊公演	渡邉　顕彦

働く男性女性のプレコンセプションケアの支援

川口　美喜子　教授
(家政学部　食物学科)

【本プロジェクトの目的と概要】

千代田区は、昼間人口構成で妊娠を希望あるいは妊娠を考える年代の男性女性も多い。妊娠前の健康は多方面からのアプローチがされているが、基本は運動と食であると考えられる。妊娠を希望するまたは将来健全な妊娠出産迎えるためには、妊娠前から健康的な身体を維持(プレコンセプションケア)しなければならない。現代は民間や風評などもあらゆる情報に困惑している状況にあり、根拠ある正しい知識を啓発するために、医療分野の管理栄養士・医師・トレーナーからの情報提供は受講者にとって確実性があり受け入れが良いと考える。今回、食の専門職域である大妻女子大学家政学部食物学科と区内で運動の普及を支援している民間スポーツスクール（IWA アカデミー）と産婦人科医師に依頼し、将来妊娠を希望する男性女性を対象に食事管理の実態調査と身体組成測定、「医療・食・運動」の講演と実技セミナーの開講および運動・栄養支援をする。

【活動スケジュールとセミナーの内容】

第 1 回セミナー2019 年 10 月 9 日(水) 参加者 6 名

第 2 回セミナー2019 年 12 月 21 日(土) 参加者 7 名

＊第 3 回新型コロナウイルスの影響により中止

1. 参加者全員が体組成測定を行い（In Body を利用)、現在の身体状態を評価した。さらに妊娠・出産に向けた望ましい身体について学び、自らのデータと比較検討し、今後の栄養と運動の課題を明らかにした。
2. 運動指導では IWA アカデミー運動指導インストラクター（吉田千鶴氏）より、妊娠に向けた体作りの為のストレッチや呼吸法、体の整え方の講義と実技を行った。講師（経産婦）の実体験を交えた運動指導は、実践的で分かりやすい内容の指導であり、体のバランスを整える事は妊娠に向けたコンディション作りになると共に、産前産後の腰痛などのトラブル軽減になる事を学んだ。
3. 栄養指導では、妊娠を希望する方に必要な栄養素を考慮しながら、旬の食材を取り入れ、簡単に調理できるメニューを提案した。

   試食を行いながら栄養についての解説、調理の工夫や食材のアレンジ等のレクチャーを行った。

   また、第 2 回セミナーでは産婦人科医（産科婦人科舘出張 佐藤病院院長 佐藤雄一氏）を招き、女性ホルモンと不調についての講演をいただいた。

（運動）　実際に動いて姿勢や呼吸を確認

（食）旬の食材で簡単に作れるメニューを提案

（医療）　第 2 回セミナー産婦人科医師による講演
講演後の質問時間には参加者から多くの質問が寄せられた。

【まとめ】

食・運動・医療の 3 点から支援するセミナーは少ないこともあり、いずれの回でも参加者からはセミナーの継続開催を希望する声が数多く寄せられた。

今後も妊娠出産を希望する方への専門的な知識の提供を継続して行っていきたい。

多摩図書館ツアー2019(学びのかなめ、公共図書館、学校図書館、大学図書館、そして世界の図書館を知る)

深水　浩司　常勤特任講師
(教職総合支援センター)

大学で学び研究する者にとって大学図書館は必須施設であり、学びと研究の中心に位置する。地域で生活する住民にとっては、公共図書館や学校図書館、公民館などが学びの場であり社会教育の場として、我々の知る権利や学ぶ権利を下支えしている。大妻女子大学多摩校は、より地域に開かれた大学として、これら館種の異なる図書館を結びつける要になることも務めの一つだと考えている。図書館を学び研究する立場から、地域に貢献できる可能性がそこにあると考えている。

本年度の取り組みは、図書館という切り口で、学生（図書館サークル OLIVE）と教員が中心となって開催するイベント（和装本メモ帳作り）を皮切りに、多摩市立唐木田図書館、大妻多摩中学高校図書館、そして大妻女子大学多摩校大学図書館をツアーで巡る。最後に、講演会「映画『エクス・リブリス』にみるニューヨーク公共図書館』を開催し、世界に広がる図書館を体験するツアーイベントプロジェクトとした。開催日時は 2019 年 8 月 10 日(土)、9 時 30 分～18 時 30 分であった。当日は、多摩テレビ（地域ケーブルテレビ）の取材も受け、同局番組 TTV-NOW にて、8 月 16 日~22 日の間放送された。参加者は 40 名であった。

1 学生による図書館説明と多摩市立唐木田図書館見学（9 時 45 分～10 時 30 分）

9 時 30 分に小田急線唐木田駅近くの、多摩市コミュニティーセンター菖蒲館に集合し、参加者と共に準備を開始した。その後、学生による図書館の説明（図書館の館種や目的など）を行った後、2 グループに分かれて菖蒲館内の多摩市立唐木田図書館（公立図書館）を、学生先導で見学した。

2 ワークショップ 和装本メモ帳作成（10 時 30 分～12 時 30 分）

場所を菖蒲館 2 階のホールに移動し、和装本（和紙と麻糸による四ツ目綴じ）メモ帳づくりを行った。事前に用意した和紙を折り、表紙を付けて麻糸で綴じる作業を全員で行った。和装本作りは、図書館学課程「図書館情報資源概論」の授業内で行っているものを、一般向けに変更し実施した。講師は深水が担当し、学生は参加者のサポート役として、適宜、指示や作業の手伝いを担当した。

できる限り簡単に作業ができるように、事前に使用する部材（本文や表紙の和紙等）は一人分を袋に分けて準備したが、40 人の参加者間での作業進行状況も異なり、終了が少し伸びてしまったのは反省点である。しかし、参加者には大変好評で、異なった種類の表紙(20 種類準備）選びの段階から、麻糸での綴じ作業まで、楽しみながら進めることができたようである。作成したメモ帳と余っ

ワークショップ風景

た和紙等はお持ち帰りいただき、「素敵なお土産となりました」とのアンケート回答も頂けた。

3 大妻多摩中学高等学校図書館、大学図書館見学（13 時 50 分～15 時 30 分）

昼食は各自で済ませていただき（学食も利用）、13 時 45 分に大学 2 号館 1 階ロビーに集合した後、中学高校の学校図書館を見学した。学生によるツアー形式、解説付きの見学である。見学後の質問には、司書教諭の渡辺登紀子先生と事務室長の髙山珠水先生の協力も得ることができた。更に、学校長の谷林眞理子先生にもご同席頂くことができた。参加者からは、「こんな素敵な図書館があるのを初めて知った」等の、日頃入ることのできない図書館での貴重な経験による感想が多く寄せられた。

14 時 45 分からは大学図書館見学である。これも、学校図書館と同様なツアー形式をとり、学生の適切な解説は、参加者には好評だった。学校図書館同様、地域住民の方が入ることのできない図書館なので、多彩で専門的な資料の多さに驚く参加者が多くおられた。

学校図書館も大学図書館も、地域の住民には利用できる機会が少なく（本校は女子学校という特性もあって）、身近に素晴らしい図書館があることを知っていただく良い機会となった。事実、参加者からは、「もっと多くの方に見てもらい、出来れば利用してみたい」や「自分の子供がもう少し小さかったら大妻に進むことも考えた」などの感想もあった。

4 講演会「映画『エクス・リブリス』にみるニューヨーク公共図書館」（15 時 45 分～17 時 30 分）

図書館見学後、2 号館 3 階大講義室で、深水による講演会を行った。ニューヨーク公共図書を題材にしたドキュメント映画『エクス・リブリス』のダイジェスト版（20 分）を配給会社ミモザフィルム様から借受け、それを上映しながら、適宜解説を加えた。本編は 3 時間以上の大作だが、そのエッセンスをまとめたダイジェスト版では、内容を理解するためにシーンごとに停止し解説をする必要があった。ニューヨーク公共図書館は、「世界一有名な図書館」としても知られており、先進的な部分と伝統的な図書館の側面を持っている。日本の図書館とどのように異なるのかも含めて解説することで、より広く「図書館というもの」を理解していただけたと考える。

上映後の質疑応答では、図書館一般に関する質問のほかにも、数年後に開館予定の多摩市立中央図書館に言及する質問もあり、一参加者としてお越しいただいた多摩市立図書館長の横倉妙子氏と唐木田図書館長の東本清美氏も、熱心に耳を傾けていた。

5 終わりに

今回のツアーは、様々な方々の協力なしで開催することはできなった。まず、ともに企画を進めてきた大妻女子大学図書館サークル OLIVE メンバーの皆様、特に当日ツアーのリード役を務めてくれた足立美樹さんと野々山絢さん（ともに人間関係学部）には最大の感謝を申し上げたい。次に、見学の場を提供頂けた中学高校の諸先生方と大学図書館の関係者の皆様、多摩市立図書館の皆様にも、打合せ等で貴重なお時間をいただき、改めて感謝の意をお伝えしたい。更に、ミモザフィル様には本来上映することも難しいダイジェスト版のご提供を、多摩テレビ様にはツアーの様子と共に、中学高校と大学の図書館を広く住民の方々に報道いただくと共に、大学の地域貢献やサークル活動もご紹介いただけたことに感謝申しあげる。

図書館学課程担当の教員としては、今後も、多くの方々に様々な図書館を知っていただき、かつ、利用いただけるような仕掛けを進めていこうと更なる決心をしたプロジェクトであった。

大妻力による世羅町の６次産業化支援を

区民の健康力向上につなげる地域貢献活動について

堀口　美恵子　教授
（短期大学部　家政科　食物栄養専攻）

【目的】

「大妻力」をキーワードとする本プロジェクトの目的は、様々な学部学科の卒業生（食物系・児童系・被服系・文系；昭和46年度～平成30年度卒)、食物系教員、及び、栄養士、管理栄養士、栄養教諭、家庭科教諭、フードスペシャリスト等を目指す学生が連携し、大妻での学びや各専門領域から創出される成果を、世羅町の6次産業化支援を通じて区民の健康力向上に資することである。さらに学生のユニークな発想力を活かしたレシピの考案、イベントの企画・運営等の多世代に対する主体的な活動により、学生のコミュニケーション能力や学習意欲の向上、キャリアデザインや関係的自立の体得につなげることも目的とする。

【方法】

代表者が今まで培ってきた千代田区との関わり[1]や世羅町との関わり[2]を活かし、世羅町の６次産業化支援を地域貢献活動として実施するためのイベント等を企画した。すなわち、世羅町の特産品に着目した食育活動や生活環境を豊かにする手工芸品に着目した活動を実施し、区民の健康力向上を目指す取り組みを行った。

[1] 地域コミュニティ醸成支援事業「ちよだコミュニティラボ」実行委員・食育推進検討会「ちよだ食育ネットワーク」講師・環境まちづくり部「千代田エコシステム推進協議会」登録者・社会福祉協議会「食から広がる親子ふれあいサロン」登録者としての活動

[2] コタカ先生の生家・世羅町６次産業化ネットワーク事務局・世羅町観光協会・世羅道の駅・甲山いきいき村・世羅茶再生部会・世羅町森林組合・世羅町観光大使・世羅ワイナリー等との連携

【結果】

世羅町への視察（8月29日～31日）として世羅町役場、コタカ先生の生家、6次産業化ネットワーク事務局、世羅町観光協会、世羅茶の畑と工場、世羅道の駅、甲山いきいき村、世羅ワイナリー、世羅きのこ園、世羅幸水園、世羅町森林組合（コタカ先生が技芸塾を開いていた場所）を訪ね、6次産業化支援に関する打ち合わせを行った。これらを参考に、下記活動を実施した。

1）千代田区農商工連携サポートセンター代表との打ち合わせ（10 月 18 日）

世羅茶再生部会代表者と共に千代田区農商工連携サポートセンター代表との打ち合わせ、及び、ちよだいちばイベントの視察を行い、世羅町物産展の実施に向けた情報交換を行った（その後、ちよだいちばの移転に伴い、世羅町物産展の開催が不可能になったため、3）と 4）のイベントを新たに行うこととした)。

2）千代田キャンパス大妻祭への参加（10 月 26 日）

世羅町特産品を活かした心身の健康力向上に関連する取り組みや食育活動等を、学生と卒業生が連携して行った。具体的には、世羅町の生鮮食品・世羅高校で開発された加工食品・世羅茶・ドライフラワー・間伐材活用木工品の紹介、洋風松きのこ御飯・世羅梨ゼリー・世羅茶の特産品試食セットの提供、及び、世羅町に関する食育クイズやゲームを行い、区民等多世代の参加者に本プロジェクトに関する理解を深めて頂いた。又、世羅町長や大妻コタカ記念会会長にも来場頂いて交流を深められたことは、本プロジェクトのスタッフ（学生・卒業生・教員）の活動意欲を高めることにもつながった。

3） 日本食生活学会創立 30 周年記念大会における活動（11 月 30 日）

本学で開催された日本食生活学会創立 30 周年記念大会において、「6 次産業化支援を多世代の健康づくりに活かす取り組みについて」というテーマで本プロジェクトに関する発表を行った。又、情報交換会＆祝賀会では、学生考案レシピ等を紹介し、環境に配慮して作られた世羅町食材を活用した料理を提供することができた。なお、過去数年間に亘り行ってきた世羅町との連携活動を紹介するブースも設け、学会関係者より本プロジェクトへの高評価を得ることができた。

4） 千代田区ボランティア団体「そばちよ」とのコラボ活動（12 月 21 日）

千代田区一番町児童館において「そば打ち体験交流会」を行った。「そばちよ」からそば打ち（世羅抹茶を入れた抹茶そば等）を教わる一方、本学スタッフは世羅町食材を用いるヘルシーメニューや世羅茶を提供した。又、ヘルシーメニューのポイント、そば粉の活用例、本プロジェクトの意義についても伝えた。なお、本学食育ボランティアグループ「ぴーち」の活動紹介や災害時の非常食体験（本学備蓄のα化米の炊飯と試食）も行い、本学の地域貢献活動について理解を深めて頂くことができた。

5） 大妻さくらフェスティバル 2020（3 月 21 日実施予定→新型コロナウイルスの影響により中止）

本プロジェクトに関する取り組みの紹介、及び、世羅町特産品を心身の健康づくりに活かす体験コーナーを実施予定であった。そのために、エコな手工芸品（世羅町ワイナリーより取り寄せたワインの搾りかすや世羅茶出し殻を再利用した染色作品・世羅町の間伐材やドライフラワーを利用した作品・米紙袋を活用する作品）や食育媒体を作成する準備を行っていたが、大妻さくらフェスティバルが中止になったため、次年度に活かすこととした。

2）千代田キャンパス大妻祭(活動報告の様子・世羅町長との懇談)

4)「そばちよ」(世羅の抹茶そば)

【考察】

本学の人材を活かし、世羅町の6次産業化支援を目的として行った本活動により、区民の健康力向上、及び、学生のコミュニケーション能力や学習意欲の向上・キャリアデザインや関係的自立の体得につなげることができた。又、コタカ先生を名誉町民として今も称えて下さる世羅町の方々との連携をさらに深めることもできた本プロジェクトは、歴史ある本学が大妻精神をつないでいく必要性においても大変意義深いものであった。

Likio Ellinidon：ギリシャ伝統舞踊公演

渡邉　顕彦　准教授
（比較文化学部　比較文化学科）

大妻女子大学比較文化学部は 1990 年代よりギリシャ共和国に短期国外研修として学生を派遣しており、同国とは深く長い関係を築き上げてきている。ここ数年は特に東京のギリシャ大使館や日本ギリシャ協会とも関係を緊密にし、様々な講演会や、歴代のオリンピックトーチ展示会も行ってきた。

ギリシャ大使館の青木氏より、北ギリシャのカヴァラ市より舞踊団が 2019 年 10 月に来日し、幾つかの自治体で公演をする予定なので大妻も計画に参加するのはいかがかと打診いただいたのは 2019 年 2 月初旬のことであった。しかし連絡いただいた時点では招待用の学内予算のめどがたたず、直ぐに承諾は出来なかった。その後 2 月下旬から 3 月にかけて、比較文化学部の短期研修として学生 10 数名を引率しギリシャに滞在している間もこの話のことが時々頭に浮かんできてはいた。この舞踊団はギリシャ全土のみならずイギリスやオーストラリア等、海外のギリシャ人コミュニティーの間にも展開しているリキオ・エリニドン（Λύκειο Ελληνίδων）という非常に大規模かつ 100 年以上の歴史をもつ団体の支部であり、研修中滞在した現地ホテルでも地元支部の告知を見かけることがあったという事情もある。

ちなみにギリシャというと古代のイメージが一般的には強いが、現代ギリシャは古代の遺跡やほか古代から受け継ぐ言語や民族アイデンティティーを大切にしつつ、中世以降、ヨーロッパや中近東の諸民族とも交流し、様々な文化を発信するだけでなく受容・発展もしてきた国である。よってその民族的音楽、衣装、舞踊（今回招待した団体 Λύκειο Ελληνίδων―「ギリシャ人女性の学校」という意味がある―が継承する 3 つの文化伝統である）も、古代が基礎にあるにせよそれを時に忘れさせる程、東欧やトルコの影響も強く感じられるものである。右にある今回招待した方々の衣装からもこのような多様性が感じ取れるのではないだろうか。

招待したカヴァラ市舞踊団の方々

なお地中海は、ヨーロッパ、中近東、北アフリカ全ての地域で多様な諸民族が集い、気候も良いせいか開放的で宴会文化が盛んである。スペイン、イタリア、ギリシャ、トルコ、エジプト等国を問わず、夕暮れから夜中になると屋外で音楽を賑やかに奏で、宴会をしながら踊りを見物し、観客もしばしば加わって踊る。それもモダンなディスコやクラブのように若者限定ではなく、日本の祭りのような伝統文化として、子供から老人まで加わって共同体として楽しむのが普通である。代表者も 20 代の頃、ギリシャでこのような場に出会った記憶があり、機会があれば大妻の学生にも経験してもらいたいものだという願いを以前から持っていた。

さて新年度が始まってから本校の地域連携推進センターより地域貢献プロジェクト公募の通知があったので、学生（比較文化学部の 3 年次ゼミ生 10 名）と一緒に書類を準備し応募したところ、6 月に採択されたとの連絡をいただいた。早速ギリシャ大使館にも連絡して喜びをわかちあった。

予算の問題が採択により解決出来たので、早速 6 月より学生と共に広報と大使館との連携に取り掛かった。チラシのデザインは国府印刷に依頼し、代表者、学生、大使館と共に幾つか案を検討した結果、満足いくものに仕上がった。公演の場所としてはコタカフェ、アトリウム、体育館の可能性があったが、ギリシャ大使館の青木氏とアクパパス領事にもお越しいただいて候補を検討し、アトリウムが、照明が十分で天井が高く、音響設備もあるため最適であろうとの結論にいたった。

イベントチラシ

夏休みから後期にかけては学生が主体となって動き、広報とほかもろもろの準備を行った。代表者はこの期間、内閣府主催の国際交流事業（国際社会青年育成事業）引率者として東南アジアに行っており学生や地域連携推進センター、大使館とはメールやライン連絡を取りあっていったが全体の統括はゼミの学生リーダーが活躍した。

いよいよ 10 月 11 日のイベント当日となった。イベントの 2 時間ほど前から会場設営、ダンスグループや大使館スタッフのお出迎えが始まる。カヴァラ市の方々にはアトリウム近くの控室で民族衣装に着替えていただき、予定時間の 17 時ほぼぴったりにイベントは始まった。井上副学長・地域連携推進センター長とアクパパス領事のあいさつにより公演が始まり、大使館からお借りしたギリシャの衣装をまとったゼミ学生の司会によりギリシャ北部の伝統舞踊が次々に披露される。結婚式等、人生のさまざまな場面で何百年と伝えられてきた華やかな伝統文化である。1 時間半ほどダンス公演が行われ、最後は聴衆も加わったシルタキ（συρτάκι）というラインダンスで賑やかに締めくくられた。

全員で仲良く踊ったシルタキ

公演にはギリシャ大使館スタッフのほか日本ギリシャ協会、学内外関係者、近隣の方々50 名ほどにお越しいただき、公演終了後もしばし歓談の場をもった。日本ギリシャ修好 120 周年記念諸事業の一環として行われたこの公演は日希友好、大妻女子大学としての地域貢献、学生教育、等々多くの成果をあげることが出来た。衆議院議員松本純先生より公演前に励ましのメッセージをいただいたことも光栄であった。公演実現と成功を可能にしてくださった関係者の方々の多大な協力に改めて感謝の意を表したい。

左より代表者、イオアナ・ハリクリア・ヤナカル・ギリシャ大使夫人、井上地域連携推進センター長、アクパパス領事

大妻さくらフェスティバル 2020

新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、「俳句大賞募集」「パンフレット表紙デザイン画募集」のみ実施し、その他は中止しました。

【中止】日時：令和２年３月 21 日(土)　10:00～15:00
会場：千代田キャンパス大学校舎地下１階　アトリウム、ラウンジりょうま

アトリウムステージプログラム

会場：大学校舎地下１階アトリウム

時間	演　目	出演者
10：00	開　会	
10：00	投げ合い・一囃子 ビッグ・バンド演奏	九段小学校 九段囃子の会 九段小学校 九段 Planets
10：50	理事長挨拶	大妻学院理事長　伊藤　正直
10：55	来賓挨拶	千代田区長　石川 雅己
11：00	舞台撤収・設営	
11：10	英語劇	大妻嵐山中学高等学校 English Drama Club
11：30	コーラス	大妻中学高等学校　コーラス部(高校)
11：50	競技ダンス	大妻女子大学・法政大学・武蔵野大学 舞踏研究部
12：10	休憩	
12：20	千代田学事業報告　ポスターセッション	
13：00	和太鼓演奏	駐日英国大使館太鼓会　どん BRI
13：20	舞台撤収・設営	
13：30	チアリーディング演技	大妻女子大学 オールチアリーディング・カンパニーLYNX
13：50	創作ダンス	大妻嵐山中学高等学校　ダンス部
14：10	フラダンス	大妻女子大学 OG Mauhana Hula Studio
14：30	バトントワリング演技	大妻中学高等学校　バトントワリング部
14：50	実行委員長挨拶	大妻さくらフェスティバル実行委員長 地域連携推進センター所長　井上美沙子
15：00	閉　会	

【中止】令和元年度地域連携プロジェクト報告会プログラム

会場：大学校舎地下１階 ラウンジりょうま

時　間	代表者	所　属	プロジェクト名
10：10～10：30	八城　　薫	人間関係学部	からきだ匠(たくみ)カフェ　～地域がつながる場所～
10：30～10：50	炭谷　晃男	社会情報学部	多摩 NT における子どもと中高年の居場所づくり
10：50～11：10	甲野　　毅	家政学部	千代田&多摩地域　子供自然体験教育プロジェクト
11：10～11：30	細谷　夏実	社会情報学部	能登の里海を守る：地域の活性化と海育普及プロジェクト
11：30～11：50	石井　雅幸	家政学部	三番町アダプトフラワーロードの会との地域美化活動
11：50～12：10	小川　　浩	人間関係学部	障害者雇用企業との連携による T ボール大会の開催
12：10～12：40			休憩
12：40～13：00	堀　　洋元	人間関係学部	体験から学ぶ防災　～防災と言わない防災を目指して
13：00～13：20	川之上　豊	家政学部	大妻囲碁フェスタ　－坂の上の街を囲碁で盛り上げる－
13：20～13：40	深水　浩司	教職総合支援センター	神保町の出版と書店を元気にするプロジェクト 2019
13：40～14：00	加藤　悦雄	家政学部	子どもの育ちを地域で見届ける「大泉こども食堂」プロジェクト
14：00～14：20	松本　暢子	社会情報学部	多摩市における街区公園改修に関するプロジェクト
14：20～14：40	田中　直子	家政学部	むささび食堂：食事がつなぐ地域の輪

俳句大賞発表

応募期間：令和元年 12 月 4 日(水)～令和 2 年 1 月 10 日(金)17:00 まで

応募部門：小学生以下の部、中学・高校生の部、一般の部

応募テーマ：春の動物、水

応募総数：484 名　1,139 句（春の動物 696 句　水 443 句）

<小学生以下の部>　応募人数　28 名　45 句（春の動物　37 句、水　8 句）

<中学・高校生の部>　応募人数 206 名 400 句（春の動物 271 句、水 125 句）

<一般の部>　応募人数 250 名 694 句（春の動物 354 句、水 261 句）

※部門ごとの(　)内の句数は、審査対象外の句を除いています。

賞：理事長・学長賞（賞状、図書カード 5 千円）全テーマ全部門から 6 名（計 6 名）、受賞者 6 名

優秀賞（賞状、図書カード 3 千円）各テーマ各部門から 3 名（計 18 名）、受賞者 16 名

【中止】神輿展示

千代田区三番町町会、靖國神社の協力により、毎年夏、靖國神社で行われる「みたままつり」で本学学生が担ぐ神輿や法被等を展示。

展示みこし

【中止】エコな癒しのクラフト作り・復興支援・食育体験

地域貢献プロジェクト採択、短期大学部家政科堀口美恵子教授が代表を務めるプロジェクトの第 5 回目のイベントとして、堀口美恵子教授と卒業生講師及びプロジェクト構成員の学生により、コタカ先生の故郷である広島県世羅町のお茶やブドウの皮、千代田区の桜の花びら等で染色した布やウッドビーズを用いてコサージュを作り、世羅町のドライフラワーやヒノキ等の間伐材や染色した毛糸と共にガラス容器に飾ったり、桜型の石鹸カービングや、お米の貯蔵運搬用の紙袋を再利用したアクセサリー作り、三陸和ぐるみをガチャポンケースに入れて転がし、点数を競って遊んだり、栄養士を目指す学生と食育クイズやゲームを実施する。

イベントの作品（石鹸カービング、ティーマット、ハーバリウム）や卒業生の作品（米紙袋作品、和ぐるみ作品）などの展示。

場所：大学校舎地下 1 階アトリウム

【中止】ねりきり販売

大妻サポート購買部による、本学校章をかたどった「紅白ねりきり」の販売。

場所：大学校舎地下 1 階ラウンジりょうま

紅白ねりきり

業務報告

令和元年度の事業

1. 地域連携プロジェクト

大妻女子大学では、教職員・学生によって様々な地域連携活動が行われています。教職員のグループ又は教職員と学生のグループによる、学生の主体性や自立心が身に付く地域連携活動の一層の推進・発展を図ることを目的に、その活動経費を補助する「地域連携プロジェクト」が平成 25 年度から始まりました。

令和元年度は 14 件の申請中 12 件が採択されました。

応募受付	令和元年 5 月 9 日(木)～令和元年 6 月 4 日(火)12:00
選考結果通知	令和元年 6 月 7 日(金)
授与式、事務説明会	令和元年 6 月 15 日(土)
プロジェクト支援	令和元年 5 月 9 日(木)～令和 2 年 3 月 31 日(火)
プロジェクト報告会	令和 2 年 3 月 21 日(土) (大妻さくらフェスティバル 2020) ※新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から中止しました。
実施報告書提出締切	令和 2 年 3 月 31 日(火)

2. 地域貢献プロジェクト

大妻女子大学では、様々な地域貢献活動が行われています。広く地域のみなさまへ本学の教育と研究成果を還元し、みなさまの多様な学習ニーズに応えるとともに、地域社会の教育、学術、文化の発展に貢献する活動の推進を図ることを目的に、その活動経費を補助する「地域貢献プロジェクト」が平成 26 年度から始まりました。

令和元年度は 9 件の申請中 4 件が採択されました。

応募受付	令和元年 5 月 9 日(木)～令和元年 6 月 4 日(火)12:00
選考結果通知	令和元年 6 月 7 日(金)
授与式、事務説明会	令和元年 6 月 15 日(土)
プロジェクト支援	令和元年 5 月 9 日(木)～令和 2 年 3 月 31 日(火)
実施報告書提出締切	令和 2 年 3 月 31 日(火)

3. ホームページ開設

地域連携推進センターのホームページは、平成 25 年 6 月の運営委員会及び企画実行委員会で原案を提示して承認を得た後、同年 8 月から学内でコンテンツの制作を開始し、同年 11 月に一般公開し随時更新しています。

なお、ホームページは業者に委託せず、当センターで更新・運用しています。

4. 令和元年度 地域住民向け講座

(1)地域連携推進センター自主企画など

①令和元年 7 月 9 日(火) 15:00～16:50

令和元年 7 月 10 日(水) 12:50～14:40

令和元年 7 月 11 日(木) 12:50～14:40

浴衣着付け講座；みたままつりに浴衣で行こう

担当教員 1 名　参加者 15 名（地域の方 11 名 卒業生 1 名 学生 3 名）

②令和元年 7 月 20 日(土) 10:00～12:00、13:00～15:00

大妻みちあそび

担当教員 2 名　協力学生 80 名　参加者 95 名

③令和元年 8 月 24 日(土) 10:00～15:00

夏休み小学生講座 理科実験教室・工作教室（千代田校）

担当教員 2 名　協力学生等 12 名　参加者 35 名

④令和元年 11 月 30 日(土) 13:00～15:00

【東京 2020 応援プログラム】

公開講座　日常生活で陥りやすい著作権・肖像権の NG 行為って?

担当講師 1 名　参加者 42 名

⑤令和元年 12 月 14 日(土) 13:00～14:30

【東京 2020 応援プログラム】

公開講座　足が 1 本くらい どうってことない！

担当講師 1 名　参加者 61 名

⑥令和元年 2 月 15 日(土) 13:00～15:00

公開講座　茶を美味しく 健康に楽しむために

担当教員 1 名　担当講師 1 名　参加者 46 名

⑦令和元年度後期

多摩キャンパス実施企画

・就業自立支援をめざす「Time's café」

・大妻多摩祭 T ボール交流大会

・医療的ケア児童のファミリーフォト展

・RUN 伴多摩

5. 令和元年度 地域との交流事業

(1)チャリティコンサート

会場：大妻講堂

①令和元年 6 月 1 日(土) 18:00～20:00

パイプオルガンコンサート

来場者 約 600 名　募金 190,627 円

②令和元年 7 月 3 日(水) 18:00～20:00

スコットランドオーケストラコンサート

来場者 約 430 名　募金 100,408 円

(2)地域の方との懇談会

令和元年 6 月 15 日(土) 15:00～16:30

G 棟 3 階アクティブラウンジ

教職員 15 名、近隣町会・商店街振興組合役員及び千代田区職員の方等 17 名

(3)アダプト事業（千代田キャンパス近隣花植活動）

①令和元年 5 月 30 日(木)、10 月 31 日(木)

大学周辺歩道内の花植枡へ地域住民と一緒に花植えを実施

学生・大学教職員約 150 名、地域住民・近隣企業及び千代田区職員の方等約 30 名(両日)

九段小学校児童約 400 名

②令和元年 7 月 10 日(水)、11 月 11 日(月)

中高周辺歩道内の花植枡へ中高生徒と一緒に花植えを実施

教職員 5 名、中学生徒・教職員約 20 名(両日)

(4)お祭り参加

令和元年 7 月 15 日(祝月)

靖國神社みたままつりで神輿を担ぎ境内を練り歩き、神前に奉納。

学生 75 名、教職員 8 名、三番町町会の方等約 10 名

(5)千代田区内一斉打ち水参加

令和元年 8 月 1 日(木) 16:30～17:00

千代田区主催　千代田区役所本庁舎前オープニングセレモニーに参加

家政学部被服学科の学生が浴衣姿で打ち水を実施

学生 10 名、教職員・助手 4 名、千代田区長はじめ千代田区職員、近隣大学、地域住民・企業の方等

6. その他

(1)広報用冊子作成（大妻タイムズ No.5、No.6）

本学の地域連携活動の周知を目的に、6 月と 12 月の年 2 回各 1,000 部発行。

(2)千代田区キャンパスコンソ

大妻女子大学、共立女子大学、東京家政学院大学、二松学舎大学、法政大学の 5 大学が平成 30 年 4 月 1 日付けで包括協定を締結し活動を行っている「千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアム」(以下、「千代田区キャンパスコンソ」と表記）の担当として、月 1 回の運営委員会に出席。

令和元年度大学間連携事業

共同大学説明会

夏休み小学生講座 2019 理科実験教室・工作教室

Oxford EMI Course（共同 FD）

法政大学第 20 回 FD ワークショップ（共同 FD・SD）

千代田区との教育政策及び教育のあり方に関する座談会

千代田区キャンパスコンソーシアムウィーク

区長と学長等との懇談会

※千代田区キャンパスコンソは、令和元年度私立大学等改革総合支援事業のタイプ 3（プラットフォーム型）に申請し、採択された。

(3)女子大学連携ネットワーク

これからの女子大学が取り組む課題などについて情報交換を行い、連携協力体制を構築し、日本の女子大学が果たす役割を共に考え、語り、発言し、学術的成果を提示するとともに、社会貢献の足がかりとすることを目的として、京都光華女子大学、京都女子大学、同志社女子大学が幹事校となり、平成 30 年 3 月始動。

令和元年 9 月、大妻女子大学、和洋女子大学が新たに幹事校として参加。

(4)その他　市区町村、企業との連携協定締結窓口として機能。

①栃木県小山市との連携協定締結

令和元年 11 月 16 日(土)

②教育フォーラム（JTB 主催）

令和元年 12 月 21 日(土) 13:00～17:00

参加者約 150 名

令和元年度の予算・決算報告

単位：円

費　　目	予　算(A)	決　算(B)	差額(A－B)
プロジェクト費	4,000,000	2,538,186	1,461,814
地域連携プロジェクト	(3,000,000)	(1,559,751)	(1,440,249)
地域貢献プロジェクト	(1,000,000)	(978,435)	(21,565)
HP運営費	515,000	0	515,000
事業運営費	4,600,000	3,040,279	1,559,721
さくらフェスティバル	(1,700,000)	(1,277,416)	(422,584)
センター自主企画等	(1,900,000)	(911,185)	(988,815)
公開講座等	(1,000,000)	(851,678)	(148,322)
センター事務経費	800,000	592,534	207,466
千代田校	(500,000)	(465,680)	(34,320)
多摩校	(300,000)	(126,854)	(173,146)
合　　計	9,915,000	6,170,999	3,744,001

令和元年度の会議

地域連携推進センター運営委員会

第１回　令和元年５月８日(水)

第２回　令和元年９月 28 日(土)(文書協議)

第３回　令和元年 11 月５日(火)

地域連携推進センター企画実行委員会開催

第１回　令和元年４月 25 日(木)

第２回　令和元年 11 月３日(日)(文書協議)

大妻さくらフェスティバル 2020 実行委員会

第１回　令和元年 11 月 19 日(火)

資料

大妻女子大学地域連携推進センター規程

平成 25 年 3 月 27 日
制定

（趣旨）

第 1 条　この規程は、本学における地域連携・社会貢献等（以下「地域連携」という。）推進の中核的組織としての機能を果たすことを目的とし、大妻女子大学学則（昭和 48 年 4 月 1 日制定）第 39 条第 3 項及び大妻女子大学短期大学部学則（昭和 49 年 4 月 1 日制定）第 39 条第 2 項の規定に基づき、大妻女子大学地域連携推進センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

（業務）

第 2 条　センターは、次の各号に掲げる業務を行う。

(1)　産学官連携に関する業務

・地域連携にかかる活動や事業の情報発信に関する業務

・地域連携のためのプロジェクト事業等に関する業務

・社会（市民、企業、行政等）のニーズと大学の持つ機能のマッチング支援に関する業務

(2)　卒業生及び同窓会との連携に関する業務

(3)　中学・高校・大学との連携に関する業務

(4)　公開講座に関する業務

(5)　地域連携推進センターの分掌に係る会議に関する業務

(6)　前各号に掲げる業務の他、地域連携に関する業務

2　前項の業務を行うための事務は、センターが行う。

（組織）

第 3 条　センターに次の教職員を置く。

(1)　センター所長

(2)　センター事務部長

(3)　センター事務課長

(4)　センター事務職員　若干名

2　センター業務に関して、その共同推進、学内の横断的連携推進等を図るために、必要に応じて、併任教員を置くことができる。

3　センター併任教員は、学長が委嘱する。任期は 2 年とし、再任を妨げない。

4　センター所長は、本学専任教員の中から学長が任命する。任期は 2 年とする。ただし、再任を妨げない。

5　センター所長は、センターの業務を掌理する。また、所長に事故あるときは、所長があらかじめ指名した者がその職務を代行する。

（運営委員会及び企画実行委員会）

第 4 条　センターに、センターの運営その他の重要事項を審議するため、センター運営委員会を置く。

2　第2条に掲げる業務の企画実行を行うため、センター運営委員会の下にセンター企画実行委員会を置く。

3　センター運営委員会及びセンター企画実行委員会の規程は、別に定める。

（運営細則）

第5条　この規程に定めるもののほか、センターの管理・運営について必要な事項は、運営細則として別に定める。

（規程の改廃）

第6条　この規程の改廃は、センター運営委員会の議を経て、大学運営会議において定める。

附　則

この規程は、平成25年4月1日から施行する。

附　則

この規程は、平成25年6月25日から施行し、平成25年4月1日から適用する。

附　則

この規程は、平成27年5月26日から施行し、平成27年4月1日から適用する。

附　則

この規程は、平成29年6月6日から施行し、平成28年4月1日から適用する。

附　則

この規程は、平成30年5月9日から施行し、平成30年4月1日から適用する。

大妻女子大学地域連携推進センター運営委員会規程

平成25年3月27日
制定

（趣旨）

第1条　この規程は、大妻女子大学地域連携推進センター規程（平成25年3月27日制定）第4条第1項の規定に基づき設置される、大妻女子大学地域連携推進センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

（所掌事項）

第2条　運営委員会は、次の各号に掲げる事項について審議する。

(1)　大妻女子大学地域連携推進センター（以下「センター」という。）の運営の方針等に関する事項

(2)　センター規程及びセンター運営委員会規程等の改廃に関する事項

(3)　センターの運営に関する予算及び決算等に関する事項

(4)　その他センターの運営に関する必要な事項

（組織）

第3条　運営委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

(1)　センター所長

(2)　センター事務部長

(3)　センター事務課長

(4)　家政学部長、文学部長、社会情報学部長、人間関係学部長、比較文化学部長及び短期大学部長

(5)　人間文化研究科長

(6)　事務局長

(7)　その他学長の委嘱する者　若干名

2　前項第7号の委員の任期は、1年とする。ただし、再任を妨げない。

3　学長、副学長及び事務局各部長は運営委員会に出席し、意見を述べることができる。

（委員長）

第4条　運営委員会に委員長を置き、所長をもってこれに充てる。

2　委員長は運営委員会を代表し、その職務を掌理する。

3　委員長に事故あるときは、委員長があらかじめ指名した者がその職務を代行する。

（会議）

第5条　委員長は、原則として運営委員会を年2回招集し、その議長となる。

2　運営委員会は、委員の過半数の出席をもって成立する。

3　議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

4　運営委員会は、委員長が必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、意見を聴取することができる。

5　運営委員会は、委員長が必要と認めるときは、臨時に開催することができる。

6　運営委員会は、委員長が認めるときは、文書協議をもってそれに代えることができる。

（庶務）

第 6 条　運営委員会の庶務は、センターが行う。

（補足）

第 7 条　この規程に定めるもののほか、運営委員会の運営に関して必要な事項は、運営委員会において定める。

（規程の改廃）

第 8 条　この規程の改廃は、運営委員会において定める。

附　則

この規程は、平成 25 年 4 月 1 日から施行する。

大妻女子大学地域連携推進センター企画実行委員会規程

平成 25 年 3 月 27 日
制定

（趣旨）

第 1 条　この規程は、大妻女子大学地域連携推進センター規程（平成 25 年 3 月 27 日制定）第 4 条第 2 項の規定に基づき設置される、大妻女子大学地域連携推進センター企画実行委員会（以下「企画実行委員会」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

（所掌事項）

第 2 条　企画実行委員会は、大妻女子大学地域連携推進センター（以下「センター」という。）の運営方針に基づき、次の各号に掲げる事項について審議する。

(1)　産学官連携に関する事項
　・地域連携にかかる活動や事業の情報発信に関する事項
　・地域連携のためのプロジェクト事業等の企画・実行に関する事項
　・社会（市民、企業、行政等）のニーズと大学の持つ機能のマッチング支援に関する事項

(2)　卒業生及び同窓会との連携に関する事項

(3)　中学・高校・大学との連携に関する事項

(4)　公開講座に関する事項

(5)　地域連携推進センターの分掌に係る会議に関する事項

(6)　企画実行委員会規程等の改廃に関する事項

(7)　その他センターの企画・実行に関し必要な事項

（組織）

第 3 条　企画実行委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

(1)　センター所長

(2)　センター事務部長

(3)　センター事務課長

(4)　センター事務職員から 1 名

(5)　センター併任教員

(6)　家政学部、文学部、社会情報学部、人間関係学部、比較文化学部、短期大学部及び人間文化研究科から選ばれた専任教員（各学部 1 名、人間文化研究科 1 名）

(7)　学長の委嘱する専任教員　若干名

(8)　その他事務局長の委嘱する者　若干名

2　前項第 6 号、第 7 号及び第 8 号の委員の任期は、1 年とする。ただし、再任を妨げない。

3　前項第 6 号及び第 8 号の委員は、併任教員が兼務することができる。

（委員長）

第 4 条　企画実行委員会に委員長を置き、所長をもってこれに充てる。

2　委員長は企画実行委員会を代表し、その職務を掌理する。

3　委員長に事故あるときは、委員長があらかじめ指名した委員がその職務を代行する。

（会議）

第 5 条　委員長は、必要に応じて委員会を招集し、その議長となる。

2　企画実行委員会は、委員の過半数の出席をもって成立する。

3　議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

4　企画実行委員会は、委員長が必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、意見を聴取することができる。

5　企画実行委員会で企画した事業等は、必要に応じ、大妻女子大学地域連携推進センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）の承認を得るものとする。

（庶務）

第6条　企画実行委員会の庶務は、センターが行う。

（補足）

第7条　この規程に定めるもののほか、企画実行委員会の運営に関して必要な事項は、企画実行委員会において定める。

（規程の改廃）

第8条　この規程の改廃は、企画実行委員会の議を経て、運営委員会において定める。

附　則

この規程は、平成25年4月1日から施行する。

附　則

この規程は、平成27年5月26日から施行し、平成27年4月1日から適用する。

附　則

この規程は、平成29年6月6日から施行し、平成28年4月1日から適用する。

附　則

この規程は、平成30年5月9日から施行し、平成30年4月1日から適用する。

大妻女子大学　地域連携推進センター
令和元年度年報　第 7 号

令和 2 年 10 月発行

大妻女子大学　地域連携推進センター
〒102-8357　東京都千代田区三番町 12 番地
TEL　(03)5275-6877
URL　http://www.chiiki.otsuma.ac.jp/
E-mail　chiiki@ml.otsuma.ac.jp